第３５回阿蘇草原再生協議会　議事録

・日時：令和４年９月６日（木）13:30～16:15

・場所：国立阿蘇青少年交流の家　及びリモート

・出席者：構成員 81 名（団体 68 人+13 個人構成員）＋来賓・オブザーバー５名

＜議事内容＞

１．開会あいさつ

三宅氏（阿蘇くじゅう国立公園管理事務所）：今回も新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、対面参加とリモート参加の２形態で開催となる。天気の悪いなか、またお忙しい時期に、お集まりいただき感謝する。本日所用のためリモートでの参加となっている高橋会長より、挨拶をいただく。

高橋会長：心配していた台風も通り過ぎ、無事開催され喜んでいる。今回は通常議事を短縮し、後半に座談会を設けている。前回の協議会では事情があり座談会だけを別の日に行ったが、今回ようやく本来の形に戻った。前回は参加者が非常に多く中身の濃いものになり、皆さんの評判もとても良かったため、今回も続けて開催することになった。第３期全体構想もでき、今から具体的な対策を考え、実行していかなければいけない。座談会においても、単に問題点を挙げることも重要だが、それをどうやって実現していくか、あるいは役割分担や手続き、スケジュールもある程度想定して、目の前のできることを皆で考えていきたいと思っている。限られた時間ではあるが活発な意見をいただければと思う。本日はよろしくお願いする。

三宅氏：それでは早速議事に入る。協議会設置要綱第 10 条第２項によると「協議会の会議の議長は、会長がこれにあたる」とあるが、高橋会長がリモート参加のため、ここからの進行は山内会長代理にお願いする。

山内氏（以下：議長）：高橋会長がリモート参加のため、私が議長を務めさせていただく。本日は２部構成になっている。第１部は通常の協議会の審議だが、今日は特別に、草原再生協議会の募金に長い間協力いただいているコカ・コーラボトラーズジャパン(株)様への感謝状贈呈式を予定している。最終的には 16 時までの長い時間になるが、ぜひ最後まで参加いただき活発な意見をお願いしたい。それでは早速議事に入る。

＜第Ⅰ部　通常議事＞

２．　通常議事

（１）新規加入構成員および令和４年度役員の選任について

◆資料１－１：新規加入構成員（案）および退会報告

◆資料１－２：令和４年度役員の選任（案）　　－事務局（小島）より説明

議長：新規加入希望者が２名、団体に所属したため個人では退会する方が１名との報告があった。また令和４年度役員の選任については、従来の募金委員のうち１名が交代し、５名が今年度委員として募金委員会から推薦された。これら２件について、質問や意見があるか。よろしければ、まず新規加入構成員について承認をお願いする。

→（会場）拍手で承認

議長：続いて、令和４年度募金委員会の選任についても承認をお願いする。
→（会場）拍手で承認
議長：それでは、新規加入となった嘉藤氏と乙丸氏から一言お願いする。
嘉藤氏（野焼き支援ボランティアの会）：野焼きボランティアを 16 年ほどやっており、阿蘇には以前から関わりを持っていたので、こういった場にも参加し、意見を言わせていただければと思っている。１つ訂正させていただくと、資料１－１に紹介文が載っているが、やっていたのはパラグライダーではなくハンググライダーである。
乙丸氏（鹿児島大学）：私は熊本の出身で、高校時代にここに泊まったことと、向こうの方まで歩いていって放牧場で野宿したことを思い出した。仕事は獣医師をしており、20 年ほどになる。今は大学で教えているが、元々牛の獣医をしているので関われないかと思った。また、牛につける位置情報の研究にも携わり、放牧についても、何かしら一緒にできないかと思い、参加を希望した。よろしくお願いする。
議長：新しい２人を構成員に迎えて、これからも協議会として皆で協力してがんばっていきたいと思う。よろしくお願いする。

（２）効果的な協議会運営のための提案
◆資料２－１：効果的な協議会運営のための提案
◆資料２－２：阿蘇草原再生協議会設置要綱等の改正案　　ー事務局（山下氏）より説明

議長：協議会が発足して十数年経つなかで、もう少し効果的な運営を図る提案が事務局からあった。まず１つ目が活動計画の取扱の見直し、２つ目が協議会と幹事会の役割分担、あるいは募金委員会の承認関係の手続きの見直しについてである。初めに活動計画の取扱の見直しについては、見直し案の重要点を５項目挙げている。まず１つ目について、草原再生レポートとしてのとりまとめは継続するので、これまで通り活動計画はぜひ積極的に提出をお願いする。ただ、これまで活動計画の承認は１件１件審議をして随分時間がかかっていたので、事務局が判断して少し簡素化したいということが大きな変更点。また、これまでは毎年１回の奨励賞と３年に１回の特別賞があったが、特別賞のみに整理するということ。これらが主な改正案になっている。以上の説明について、質問や意見があるか。
→なし
議長：つづいて、協議会と幹事会の役割分担の見直しについて、今まではほとんどが協議会で承認することになっていたが、実質上幹事会で代行している点もあるので、その点については現状に合わせて変更していく。協議会幹事と募金委員の選任については任期を１年から２年に変更することも併せて、募金の予算・決算の承認、募金の助成方針等を幹事会での取り扱いに変更する提案になっている。以上について質問や意見があるか。
→なし
議長：以上、活動計画の取扱の見直し、協議会と幹事会の役割分担の見直し、それらに伴う設置要綱等の見直しについて、承認するということでよろしいか。
→（会場）拍手で承認
議長：承認いただいたので、今後は改正された設置要綱に基づいて、協議会の運営を進めていく。

（３）第 34 回協議会以降の取組進捗

◆資料３－１：第 34 回協議会以降の取組進捗

－事務局（藤田氏）より説明

◆資料３－２：令和４年度阿蘇草原維持・再生に向けた検討会議の報告

－熊本県（成瀬氏）より説明

◆資料３－３：国立公園満喫プロジェクト草原利用部会の開催報告

－事務局（小島）より説明

◆資料３－４：令和４年度阿蘇地域世界農業遺産推進協会事業計画

－農業遺産（猪野氏）より説明

議長：以上の説明について、何か質問や意見があればお願いする。

上野氏（野焼き支援ボランティアの会）：熊本県へお尋ねする。検討会議について、出席者に県の自然保護課が入っていないことに何か理由があるのか。単純に考えると自然保護課が入っているのが当然ではないかと思う。

成瀬氏（熊本県企画振興部地域・文化振興局地域振興課）：阿蘇の草原再生に関する担当課は私たちの所属する地域振興課となっており、他に今回参加しているのは、草原関係の助成制度等を有する中山間地域等直接支払金や多面的機能直接支払交付金を担当しているむらづくり課、後は阿蘇地域振興局である。自然保護課は直接的な担当ではないということで、この会議には出席していない。ただし、自然保護課は学習の方に関わっている。

議長：他に、損害賠償保険の見通しについてなど、何か質問や意見はあるか。

安片氏（小倉原牧野組合）：この春に野焼きで延焼し、補償関係の話を進めているところである。保険で新たな動きがあるということで、今後野焼きを実施する上で心強い。野焼きを実施する側としては、安心感さえあれば、皆さん積極的にやると思う。必要なのは安心感だけである。

議長：現場の方からのお話だった。多面的機能支払交付金の会議でも来春の野焼きに間に合わせてほしいという意見があったが、ぜひ具体化が進むといい。

（４）阿蘇草原再生募金活動の報告および今後の活動支援について

◆資料４：阿蘇草原再生募金について　　－募金事務局（井上氏）より説明

議長：募金についての状況と決算関係についての報告があった。以上の説明について何か意見、質問があれば願いする。

→なし

議長：昨年度の決算では、当初はかなり繰越金が減るという見通しだったが、以前の見通しよりは決算の様子は良くなったようである。令和３年度の収支決算について、承認ということでよろしいか。

→（会場）拍手で承認

（５）その他

◆資料５－１：「千年の草原の継承と創造的活用総合特区」の新計画案の概要

ー阿蘇市（石松氏）より説明

議長：阿蘇郡の７市町村に山都町を加えての８市町村で総合特区を申請して採択された。延長を検討するタイミングとなり、今回も延長したいという報告だった。以上の説明について何か意見、質問があるか。

→なし

議長：具体的なことは各市町村で詰め、内閣府と協議、あるいは新しい規制緩和等、財源の見通しがつけば、また皆さんに報告があると思う。

◆資料５－２：GIS データ等の情報公開の開始について

ー事務局（白石）より説明

議長：環境省を中心に阿蘇の草原に関するデータを収集し、GIS データにまとめる作業をしてきた。その利活用について利用規約の案を作り、データ提供者に確認を取りながら進めているようである。今年の 10 月頃から簡易版の HP を運用開始して、利用したい方が利用できるようにし、来年には完成版を目指したい。以上については何か意見、質問があるか。

→なし

議長：そういった GIS データが利用できれば、特に研究者は阿蘇の草原をとりまくいろいろなデータが簡単に抽出でき、非常に便利になるのではないかと思う。

（６）感謝状贈呈

議長：コカ・コーラ ボトラーズジャパン（株）様からは草原再生募金がスタートした頃からずっと長い期間に渡って、毎年 100 万円ほどの大口の寄付金をいただいてきている。これまでこういった機会はなかったが、今日はわざわざ東京から CSV 推進部の丸山竜一郎部長に来ていただいている。この場を借りて、皆さんの前で、感謝状贈呈式を行いたい。

◆感謝状贈呈

丸山氏（コカ・コーラボトラーズジャパン）：本日はこのような晴れの機会をいただき、高橋会長を始め山内会長代理、阿蘇草原再生協議会の皆様には改めて感謝申し上げる。私たちコカ・コーラボトラーズジャパンは会社としてのミッションを掲げている。それは「すべての人にハッピーなひとときをお届けし、価値を創造する」という、弊社の WEB サイトにも載っている言葉である。皆様一人一人の生活に寄り添って、幸せを提供し、その中で我々自身のこういった活動を通して地域に貢献していきたい。そうすることで私たち自身が企業としての価値も高めていくことができるのではないかと考えている。当然、我々は飲料メーカーなので、水はとても大切な資源である。そのため私たちのなかで、水を大切にしていく、保全するという活動はとても大きな部分を占めている。この熊本では、熊本工場があり、その水源域を守ることは特に大切な活動であると認識している。一例を挙げると、黒川地区での森林保全活動や、白川中流域における水源湛水事業、作付けを行っていない田んぼに水を張って、地下に水を浸み込ませるというような活動がある。もちろん阿蘇の草原再生も、日本を代表する水がめであり、生物

多様性の宝庫でもあるということで、とても大切な地域での活動であると我々は認識している。阿蘇の草原は私たちが世界に誇る財産であり、これからも守り続けなければいけないという、この考え方は私たちが 2011 年に募金活動を始めた当初から変わっていない。これからも我々コカ・コーラボトラーズジャパンとして、阿蘇の草原を守っていくために、様々な支援活動や、私も今年の春に野焼きボランティアの講習を受け、実際に野焼きに参加させていただいたが、他にもこうした募金活動を続けていきたいと考えている。皆様においても、今後も次世代の子どもたちに阿蘇の豊かな自然を守っていただけるよう、引き続き一緒に活動していただければと思う。最後になるが、これまでもそしてこれからも阿蘇の草原を守り続けている阿蘇草原再生協議会の皆様、そしてこの地域を一緒に守り続けている多くの関係者の皆様に敬意と感謝を述べるとともに、私からの言葉とさせていただく。本日は誠にありがとうございました。

（７）第Ⅱ部座談会アナウンス

議長：これで第一部を終了する。この後実施する座談会について、事務局より説明をお願いする。

◆座談会の概要説明－事務局（山下氏）より説明

＜第Ⅱ部　座談会＞

３．　座談会

総合テーマ：“全体構想の目標達成に必要なこと”

テーマⅠ：安心して野焼きできるシステムづくり

テーマⅡ：財源確保に向けた取組

テーマⅢ：野草資源の利活用の促進

リモート班：テーマⅠ～Ⅲについて総合的に討論

（１）テーマⅠ：安心して野焼きできるシステムづくり（ファシリテーター：山下氏）

◆テーマⅠの協議内容について山下氏より説明

嘉藤氏：恒久防火帯については、野焼きの安全性を考えると、軽トラが入れるかどうかで随分安全性が変わり、ボランティアの負担も大きく変わってくる。それが入っていれば水をどんどん補給でき、予め水を撒いておくことによって延焼をかなり防ぐ可能性が高まる。可能な限り入れられるところは入れて、四駆の軽トラが入れるようなレベルのものを作ってほしいと思う。

山下氏：重機押しでも傾斜がそんなにきつくなければ入れるのだろうか。傾斜や場所に応じて重機押しでもよければ、環境省が作っているようながっちりした舗装との使い分けができるといい。いろいろな事業メニューが示されていて、必要に応じて使えればいいと思う。

嘉藤氏：傾斜がきついところはただ重機を押しただけでは登れないので、それなりに対策をしないといけない。

それからボランティアの拡充については、交通費や手当という経済的な面も大事であるが、体力的な間口の広さも必要になると思う。例えば今は朝８時 30 分、９時からスタートして 15 時までやるのが前提になっている。牧野毎にかなりハードさが違うので、一度きついところに行った人はもう自分には無理だと思ってしまう。間口を広くするためにもっと情報を多くし、この牧野は比較的楽だからと、比較的体力がない人も来られるようにする。15 時までみっちりや

るのはどうしても体力的な問題や、怪我のリスクが増えるということもある。例えば午前で１回切って、午前中だけ参加する人もありというシステムにしていけば、より多くの人が「じゃあ次もやれるかな」と思ってくれるのではないか。そういった対策も牧野とグリーンストックで考えていただきたい。手間はかかるが、トータル的に考えればメリットが大きいのではないかと思う。

山下氏：難易度を明示する、半日参加プランもありにする、という提案だった。

山内氏：安片氏もおっしゃっていたが、安心して野焼きできるシステムづくりというのは、非常に重要なテーマである。県基礎調査の結果等を参考に牧野毎の課題を把握するとのことだが、基礎調査の結果だけでは牧野毎の具体的な課題はわかりにくいのではないかと思う。例えば恒久防火帯、保安林、動噴やジェットシューター、火傷をあまりしない服装等の機材や装備品、そういった問題をどう整備するかが、安心して野焼きできるシステムづくりに関係深いのではないかと思う。それらの課題について牧野毎にもう少し突っ込んで整理しないと、行政機関がマッチングサポートというのはできないのではないかと思う。安心して野焼きできるシステムづくりをテーマにして、協議会等で 160 ある阿蘇の草原の牧野にアンケートもしくは聞き取りを行い、その牧野に何が必要かを明らかにしたほうがいい。恒久防火帯の整備にしてもどの牧野にどれくらいの延長距離が必要なのか。ジェットシューターは阿蘇市の 66 の牧野には多面的機能支払交付金でかなり台数を用意しているが、他の市町村はあまりしていないと思う。そういった点も含めて、牧野毎に、保安林の解除が本当に必要なのか等、具体的に調査をしないといけないと思う。

山下氏：前回のテーマ１のときに市原氏から、牧野毎に事情がかなり違う、所有形態も違っているというご指摘を受けた。阿蘇市では入会権が多く、小国町の方に行くと私有地になっているということがあるから、理想を言えば個別だが、少なくとも市町村単位で話していければいいのではないかという話もいただいていた。基礎調査だとこれくらいの結果が出てくる。どうやって牧野毎に寄り添っていけるかというのは、市町村が１番地元の方と距離感が近く事情も詳しいかと思うので、市町村が上手く間を取り持ってくれるような形がいいのか考えている。

山内氏：市町村がそういう風に動いてくれることを期待したいが、以前私がグリーンストックで担当したときは、頻繁に市町村を回り、市町村の畜産・草原担当者もそれなりに草原のことは知っていた。しかし、今回草原 100 選関係で各市町村を回ったが、担当者も若くなっていて、阿蘇の草原についてあまり知らない方が増えてきているようだった。各市町村の草原への関心が薄れている気がする。そういった市町村に、牧野と向き合っていただくことが重要ではないかと思う。

山下氏：そのあたり肌感覚として牧野の方々はどうか。

市原氏（町古閑牧野組合）：自分の牧野は管理できているが、管理する人がいないから火入れの講習に来てほしい等いくつかの牧野から要請があって行った際に、そこの組合の人が全くいないということもある。そこをうちの牧野でやってくれないかという要請があり、組合に下ろしたところ、私がいるときはいいかもしれないが、後継者が変わったときは誰が引き受けるのかという問題があった。自分たちの仕事との関係上、引き継ぎはできないということで、二の足を踏んでいる。もし野焼きに行くとしても、防火帯からきちんと整備しないと、今の状況では難しい。そうなった場合の準備にかかる経費をどうするか。市や県の補助金が即出るわけではな

いだろうから、自分たちで支出しないといけないということであれば、そこが問題になってくる。要請があった牧野に入るとしても、どれだけ費用がかかるかというのがわからない状況である。そういった牧野がいくつか点在し、今までは個人的な家族運営でなんとか野焼きができていたが、あまり草原として使っていないから草が伸びる一方で、だんだん怖くなって、できないということをおっしゃっている。そのため防火帯の整備は非常に重要になってくる。恒久防火帯と言っても、そういう小さな牧野でできるだけの資金はないと思う。それをどう援助するかも関係してくると思う。メリットがあるわけではないという考えの人もいるので、結局はもう藪にしたらいいのではないかという話にもなってくる。

山下氏：全部の話が繋がっている。そういう意味で全部を同時に解決していくようなことをしなければいけないのかもしれない。そういうときにどういう役割が必要になるのか。例えば組合員による野焼きが難しくなっているところが、市原氏に相談に来る。片や使える支援メニューやボランティア派遣の仕組みも整備されている。そのため、自力での管理困難な牧野がそもそも誰に相談したらいいのかわからないということが問題の背景にあるのではないか。

市原氏（町古閑牧野組合）：その課題に対しては、グリーンストックの役割が大きいだろう。個人の方から直接要請があることもあるが、そこの組合の年長者たちが皆高齢でもう動けない、動くのは口ばかりという状況である。若手も付いていけずボランティアより悪い状態なので、なかなかできないという現状である。

山下氏：一例だが、それぞれが持っている情報もあるはずで、それをちゃんと支える側の人たちが共有するというのも、山内氏の先ほどの懸念に答える１つのやり方であるだろう。

嘉藤氏：10 年後に野焼き等の維持管理作業が続けられるかのアンケートをとったことで、それぞれの牧野に対してなぜそうなっているのかを把握しているかと思う。その情報を基に牧野と協議して、すぐにでもやめてしまう牧野に対しては早いサポートが必要かと思う。どういったサポートが必要かという情報を収集して、それぞれに応じた策を講じないといけない。それは資金なのか人なのか、グリーンストックで対応できるのか、牧野同士の連携によって火引きを派遣することでなんとかするのか。そういったことを防火帯作りよりもっと近々にやらなければいけないと感じる。

山下氏：おっしゃるとおりである。各牧野が悩む課題や要請が出発点になっていて、牧野間の連携という話もあったが、いかに牧野側の情報を的確かつ詳細に把握できるか。あとはしっかり様々な支援メニューがあることを提示出来れば、上手くマッチングは出来るだろう。

春山氏（西湯浦牧野組合）：私たちの組合がだいたい 360ha くらいで、組合員 50 人くらいで運営している。防火帯を作ろうとしたときに新規に作ると１m1,600 円くらいの補助が阿蘇市から出る。私たちの牧野も前回の整備からもう 10 年近く経っており、防火帯に草が生えてきている。これにまた機械を入れるとすると 800 円くらいの満額の補助が出るということである。まずはその資金が確保できるかが一番問題である。補助をもらっても牧野自体が持つお金がないのではないか。

山下氏：自主財源がある程度必要になってくるということだろう。

春山氏：軽トラの話が出たが、資金さえあればいいことだと思う。それこそ牧野内に防火帯と一緒の、コンクリートで軽トラが走れるような道を作れるのであればそれに越したことはない。草を刈る必要もなく、防火帯で改めて切る必要もない。ただ財源が問題である。何 km でもでき

れば理想なのだが。またボランティアの参加についてだが、一昨年からボランティアに入ってもらって２年目になるが、私たちの牧野では半日しか滞在されない。そのため作業の途中でお昼ご飯を食べて、帰っていくことになる。牧野の事情に応じて情報を入れて貰って、食事などの負担は牧野側が請け負っても仕方ないかなと考えている。また、ここ１～２年女性に参加していただいているが、トイレが充実しておらず、女性にとって無理なお願いをしている気がしている。トイレなどのインフラ整備も必要ではないか。ただ、１番の根本的問題は、火付け責任者が牧野組合長であるということである。

郷氏（下磧牧野組合）：うちの場合は牛を預託しているわけだが、今までは呼びかける程度で強くは言わなかったが、ここ２～３年は「できるだけ」という言葉を使って、野焼きの時に加勢をお願いしている。それで思ったのは、牧野組合員の相互でボランティアを行うと相当楽であるということ。去年実際にやってみて、牛を見てきているのでだいたいの地形がわかっているし、お互い話しても「今どこどこのどういう」「わかった」とコミュニケーションができるので、牧野組合での相互間の協力も必要になってくるかと思う。もう１つは、市町村の職員は牧野に登る機会がない。だから机上だけになってしまう。どういう場所に何があるか昔の人は皆知っていたが、今の若い人たちは知らない。いかに職員に理解してもらうかは難しい問題になってくる。牧野のことを畜産課が知っているかというとわからないと思う。これは仕方ないことだと私は思う。何かあったときには検査で登ってきて、地震のときは職員がよく登ってきた。あと１つは、半日参加は、組合側としてはなかなか受け入れがたいものがあると思う。午前中は10人いて、午後は５人しかいないということになると、野焼きができない。恒久防火帯等があれば、ある程度は歩くのも楽になってくるかと思う。急傾斜で１日というのは確かに無理なところもあるが、しかし半日参加というのは私の牧野では少し受け入れがたいものがある。

嘉藤氏：それぞれの牧野の状況があると思う。元々半日で終わるような牧野もある。状況に応じてやっていけば、参加するボランティアももっと広がるのではないか。全ての牧野にそれを押し付けるのは無理と重々承知している。

郷氏：事前にお互いでやりとりをしておかないと、その時に言われても無理かと思う。それと、保険のことも村長に相当言って、今現在南阿蘇村では行政の長が責任を取ることになっている。もはや一牧野の組合長や駐在区の区長が責任を取る規模ではない。首長が責任をとってもらうように、県等が主導する立場になってもらわないと無理である。うちも人身事故があったので、特に私は村長にお願いをした。悪い言い方になるが、村長は辞めれば責任がないわけだが、私たちはあの時の委員長は誰だったかと末代まで言われる。責任の度合いが違う。だからこれは行政の長がどうしても責任をとってほしいと村長に相当言った。今損保ジャパンと話をしているということなので、ぜひ環境省も阿蘇郡全体の町村長が責任を取るという形を推し進めてほしい。どこが事故を引き起こしても大変である。夜も眠れないだろうし、一人で責任をとらないといけない、誰にも相談ができない状態である。しっかりとした責任を首長がとってもらうように、お願いした方がいいと思う。

緑氏（西小園原野組合）：安心して野焼きができるようにということだが、危険なのは火をつけるからであり、補償の問題も出てくる。延焼しないために輪地を切っているが、輪地を切るのに動力不足、人がいないということで、軽トラや動噴という意見が出た。現在何ヶ所かの牧野に行っても、後継者不足が大きな問題になっている。後継者がいないので参加する者がいない、

火をつける者がいない。地元の方がいないと、ボランティアだけでは若干不安ということになってきている。その状態を考えれば、行政がまとめてもいいが、数牧野が協力をして、準備の段階からでも集まり輪地を切る、野焼きも持ち回りのようにする。前は援農というのがよくあった。田んぼの稲を植えるのにお互いに協力してやったということからすれば、できないところがあれば、数牧野が協力して、まとめて野焼きをするのもいいのではないか。また保険問題が出ているが、保険が早急に整備されることは難しいと考えている。しかしそれまでの間に牧野は不安を持っていて、現時点でも野焼きをやめる、保留する牧野がたくさん出てきている。自治体からもすぐ話は出ないかもしれないが、市町村の牧野については、全部とは言わないがある程度は補償する、または阿蘇草原再生協議会で予備費を持ち、何かあればそこから出す等、早急に安心して野焼きができるように考えていったらどうか。

山下氏：後継者不足に端を発して、これまで通りのやり方だけでは上手くいかないというのが見えてきている中、どういう体制をこれから先作っていくのかという、１つの提案をいただいた。

市原氏：うちは後継者が出てきたが、50 歳を過ぎている年齢の人ばかりである。ボランティアよりも経験が少ないような組合員もいる。そういった人にボランティアをうまく使って野焼きをやれというのは無理がある。だいぶ慣れている者がいるからなんとか行えるのである。ボランティアをうまくコントロールしながら使わなければいけないので、ボランティアに声をかけてもらうようお願いはしているが、素人と同じ段階である。ボランティアは１年にあちこちの牧野で何度も経験するので、２～３年で組合員と同じくらいの経験をする。後継者ができたとしても経験不足なので、訓練していかなければと思ってはいる。

山下氏：県や、ボランティアの運営を担当している鷲津氏から何かあるか。

鷲津氏（阿蘇グリーンストック）：私は阿蘇の草原の野焼きが難しいのは管理の特殊性にあると思っている。160 ある牧野が草原のなかで区域分けされ、それぞれがそれぞれを担当している状況が難しくしていると思っている。本来そういったものを管理するのであれば、組織的にやるのが当然だと思う。しかし牧野単位での管理がピースのように合わさって、パズルが完成したら野焼きが終わるというような状況である。自分も黒川牧野なのでよくわかるが、野焼きの野の字も知らないような方が野焼きのその日だけ出ていって、火をつける。そういうのはどこの牧野にもあるのではないかと思う。たまたまうちの牧野はやりやすいところなのでいいのだが、黒川牧野でも隣はとても大変な場所があって、牧野単位の管理の仕方が現状に即してないのではないかと思う。牧野の解体というと急すぎて難しいかもしれないが、それぞれの牧野のエリアだけをやるのではなく、牧野同士の連携、例えば A、B、C の牧野を A、B、C の地区あたりの人が分け隔てなくやるという、大きな区分けをしていく。そうすれば人的なところはある程度、単独でやるよりはカバーできるかと思う。そういう大きな区分けをいくつか作って、教育的な安全管理面では火引きの講習などを組織的に行う。地元の方でも基本的なところを含めて組織的に教育していく。そうやって大きな区分けに入らない小さい単独の牧野をボランティアがカバーすると、人的資源もうまく回せると思う。そういった連携や組織が必要かと思う。

成瀬氏：県では環境省と連携しながら、恒久防火帯、保険、保安林等の検討や取り組みを進めているところではある。先ほどの意見交換の中でもあったと思うが、県や環境省だけでは難しいこともあるので、市町村の協力が絶対に必要かと思っている。第１部で説明した通り、市町村向けの勉強会を７月 20 日に開催した。まずは草原がどういうものか、県や国でこういう事業が

あるということ、こういう取り組みを行っているというのを、改めて市町村の方にも知ってもらい、今後また連携していかなければいけないと思っている。保険の加入や火入れ責任者の話もあるので、やはり市町村には積極的に参加していただきたいと思っている。私たちの方で９月末くらいに各市町村を回って、状況調査等行っていきたいと考えている。今日の皆さんの意見もバックした上で、今後調整を進めていきたいと思っている。

山下氏：時間も来たので、一旦まとめる。まず牧野別の課題をより深く、どうやって把握するかという話があって、基礎調査よりももっと詳しい調査をしたらどうか、市町村が詳しいのではないか、グリーンストックが日頃お付き合いをしている関係で詳しいのではないかという意見があったと思う。県もこれから市町村を回るということだが、どういう形で情報を把握するかは別として、ここを１つの出発点として、問題意識を持っていく。その上で、いろいろな事業があるなかで、やはり皆さんからよく出てくる意見が、牧野道の整備である。動噴や軽トラが入れられるかどうかで決定的に効率が変わってくるということなので、そこは１つキーワードになるだろうということ。火付け責任の話も毎回いただいていて、県が進めてくれているのがありがたいが、西小園原野組合の緑氏からは、保険ができるまでの繋ぎのようなものも必要によっては考えてほしいということだった。根本的だと思ったのが、後継者不足の問題である。野焼きの新しい体制をこれから先考えていかなければならない。ボランティアにより有効に動いてもらうことや、あるいは組織的な組合同士の連携、牧野毎や市町村毎に形は違ってくるのかもしれないが、ここをうまく把握しつつ整理していくことができれば、安心して野焼きできるシステムづくりというのもまた一歩前進できるかと思う。

嘉藤氏：安心できるとはどういうことか。今回安片氏が非常に苦労されたのは、延焼が起こってしまったときにどうしたらいいんだと一人で抱えてしまったということである。そういうことであれば延焼対策委員会のようなものを設けて、そこにすぐ相談できたり、アドバイスや実際に動いてもらったりできれば、もし何かがあったときに牧野の責任者の方々も負担が減るのではないか。

安片氏：ありがたいご意見である。市町村の話が出たが、市町村の担当者というのはせいぜい２～３年で変わるので、野焼きの必要性を訴えてもあまり身にならないのかと思う。それよりも各市町村の首長、市町村長が同じ方向を向かないとできないと思った。阿蘇市は野焼きができるが高森町は各牧野に任せようということだと、安心して野焼きができるシステムができないのではないか。阿蘇郡市全部が同じ方向を向いて進んでいくことが、まずは大事なのではないかと思う。野焼きの必要性をもっと訴えていかなければいけない。

山内氏：牧野毎に抱えている課題についてもう少し突っ込んだ話をすると、県の基礎調査で非常に多岐にわたった調査をやった。それはそれで意義があったと思うが、安心して野焼きできるシステム作りということに的を絞って、牧野毎にどういう課題があるかということを抽出した方がいいのではないか。そうすればどういう対応をすればいいかが見えてくるのではないか。

春山氏：関係ないかもしれないが、阿蘇市の集まりがあって、野焼きの時期の問題が話題に上がった。だいたい３月 20 日くらいに、北外輪山の野焼きがだいたいできていた。例年、３月始めくらいから３回か４回の延長をするのが、昨年度は（延長なく）１回の野焼きで終わっている。雨で延期がなくその土地も乾いているし、新芽も出ていないので、あまりにも早すぎて、ああいう事故が多かったのではないかという推察であった。野焼きの時期が果たして正しいのかと

いうのか意見を聞きたかった。機会があればその点の検討もしてほしいということだった。
山下氏：駆け足になったが、一旦こういう方向性でまとめさせていただく。

（２）テーマⅡ：財源確保に向けた取組（ファシリテーター：増井氏）

◆テーマⅡの協議内容について増井氏より説明

増井氏（阿蘇グリーンストック）：今回は企業関係者も参加して貰っているので、ぜひ企業向けにどういったアプローチができるのかを深堀していき、今後事務局で熊本県内の企業にあたっていく際に「こういう取り組みをしている企業にアプローチした方がいい」等、なんとなくゴールとして見えればいいと思っている。

◆自己紹介

増井氏：企業団体の寄付が現状 68％ということで、どういった企業が多いのか、特徴はあるのか、気づいた点があれば紹介願いたい。
井上氏（阿蘇グリーンストック）：募金ニュースに昨年度の協力企業団体を載せているが、ほとんど大口寄付は決まっていて、イオン九州、コカ･コーラボトラーズジャパン、伊藤園。クオカードはクオカードを売った手数料が入ってきている。その辺りがだいたい大口寄付になる。
増井氏：大口でないのは何社ほどあるのか。
井上氏：大口でないところは、毎年ではなく何年かに１回寄付をするところもある。今年は NOK 株式会社から初めて寄付をいただいた。企業サポーターの関係で今年度から３年間という約束である。
増井氏：企業サポーターについては、もしかしたら今後募金を増やす上での起爆剤になる１つかと考えている制度である。実は去年から熊本県が始めている阿蘇草原応援企業サポーター認証制度という事業である。

◆阿蘇草原応援企業サポーター認証制度について岸本氏（熊本県）より説明

増井氏：こういったサポーター認証制度があり、県が認めることで、一定の効果があるかと考えている。実際に東京応化工業というこの麓にある会社から、サポーターになると県の HP 等に会社を掲載してくれるということで、10 万円の寄付をいただいた。こういったオフィシャルに行政が認めるといったことも効果がある、企業に響く１つのキーワードなのかもしれない。せっかくなのでコカ･コーラボトラーズジャパン様にお聞きしたいのだが、募金をする理由や意義、もちろん社会的な意義もあると思うが、会社の中でどういう理解を得て、資金を出していただいているのか。そういうところのからくりと言っては何だが、こういった情報があれば企業からもっと支援していただけるかもしれない等、お気づきの点があればお答えいただきたい。
丸山氏：先ほどの挨拶の中でも触れたが、私たちは水を扱っている企業なので、そもそも水がないとビジネスができない。地下水を汲み上げて、製品として皆様にお届けしているわけだが、

逆に言うと我々自身も地下水を守っていかないとビジネスが潰れてしまうということである。そういう事情もあるので、地下水保全は大事なテーマである。地下水保全というと森林保全が一番大きく、あとは草原再生、水田湛水等になると思うが、私たちは林業や農業の会社ではないので、草原を守る、森林の手入れをするノウハウはない。そのため、森林組合や草原再生協議会の協力を借りて、そちらを支援することで間接的に私たちの事業にとって一番大切な資源である水を守っていく、こういう考えの下で募金活動をしている。

増井氏：実際の事業に必要となる資源を持続可能な形で得るということが、１つキーワードかと思う。前回の座談会で企業にアプローチが必要だという話が出たが、例えば水をテーマにして、水をたくさん使っているような企業や、草原が生んでいる恵みを使っているような企業にアプローチするのが、比較的理解が得やすいのではないかということかと思う。

丸山氏：昨今あちこちで SDGs という言葉をご覧になったことがあるかと思う。やはり持続可能なビジネスをしていくためには、我々のような飲料メーカーはまず水が必要であるし、当然熊本に工場を持ってくる企業は熊本にニーズがあるから来るので、その中には地下資源、きれいな水を求めてやってくる企業も多いと思う。そういった企業はきれいな水を支援していかなければいけないという認識は持っていると思う。我々のビジネスは食品産業の中の飲料セクターであるわけだが、他の建築や造船等と比べると、飲料というのは日々の生活で手にする機会が多く身近である。我々は消費者と近いビジネスをしているわけである。地元の理解を得なければいけないし、地元が発展していくことで私たちのビジネスも発展していくという考えである。先ほど CSV 推進部という紹介があったが、CSV とは何か知っている方はいるだろうか。

下田氏（環境省九州地方環境事務所）：CSR とは違うのか。

丸山氏：CSR は Corporate Social Responsibility、企業の社会的責任というものである。CSV とは Creating Shared Value、共創価値。共に創られた価値。要するに我々ビジネス側と消費者と、私たちのビジネスを通じて、皆さんにも利益があり、我々にも利益がある。例えば、水源保全活動も、皆さんにとっても地域を存続し活性化していくためでもあるし、それを支えるということ自体が私たちにとっても実は事業を成長させることに繋がっていって、こういう Win to Win の考え方を Creating Shared Value と言っている。これはハーバード大学の経済学者が最初に提唱した考え方で、この方は元々マーケティング戦略の専門家の教授だった。私たちは慈善活動としてやっているのではなく、マーケティングとしてやっている。それが実は地域の発展にもなるし、もちろん私たちのビジネスの発展にもなるという考え方で、Creating Shared Value を、経営の理念としている。我々の HP にも経営の理念の根幹として CSV を推進していくと載っている。こういう考え方で活動している。

増井氏：共創というものが、世の中的にもキーワードになっているのかと思う。もう１点質問である。おそらくコカ・コーラさん側が、工場があるということで、阿蘇という場所を選んでいただいたのだと思う。今の募金はどちらかというと受け身なものかと思うが、営業ではないが、こちらから阿蘇にはこういう価値があるので一緒に守りませんかと言っていく仕掛けも必要かと思う。企業からすると、団体側からこうして言ってくるのは、あまりウェルカムではないのだろうか。

丸山氏：少なくとも我々はウェルカムだと思っている。今日私が伝えたかったことがある。先ほど言ったようにお互い Win to Win の関係を築きたいと思っていて、そのために支援をして、逆

に我々もこういう風にしてほしいということもある。その中で先ほどのGISのデータシステムというのは、企業としては非常にありがたいことだと思っている。SDGsの話に戻るが、自然を大切にすること、生物多様性、炭素固定といった面で、森林保全はいろいろな可能性を持っていると思う。それこそ防災の役目も果たしている。私たちとしては森林を保全することで気候対策や生態系、水資源の保全をしていると地域に対してアピールができることで、消費者に対して我々の活動を理解してもらうことができる。理解してもらうということは、それだけ価値が上がるということである。そういうことが言えるような仕組みとして、データはとてもありがたい。我々がそういったデータをどう活用したいかと言うと、実は企業を評価する第三者機関が日本にも、世界的にもある。よく銀行でも格付け評価というものがあるが、あのようなものに我々も当然格付けされる。その中には営業活動ではなく、自然活動や水、生態系の保全をきちんとやっているかという評価項目もある。数字が落ち込んだりするところもあるので、願わくはそういった設問に合ったようなデータがあると、企業としてもとてもありがたい。我々だけではなく、同じように第三者評価を受けている企業としても、そういうデータがあると本当にありがたいのではないかと思う。

増井氏：個人的には非常に良いお話を聞けたと思った。

竹内氏（福岡女子大学）：私もボランティアをしているが、例えばゼッケンにいろはすなどの商品が書いてあると思うが、そういうように商品名や企業名が出る機会を増やしてほしいというニーズはあるのだろうか。

丸山氏：ある。

竹内氏：まだまだボランティアにワッペン等つけられるのではないかと思う。

岩本氏（野焼き支援ボランティアの会）：ボランティアとしてはウェルカムである。

竹内氏：なんだかんだ名前が出る方がいいのではないかと思う。私もそれを見ていろはすを買ったこともある。

丸山氏：企業としてはありがたいが、ただ逆に何にでもロゴをつけられるかというと難しく、きちんとそのロゴの使用方法について管理基準がある。そのため我々の製品を提供して、来た方に飲んでもらったり、タオル等を配ったりということはできると思うのだが、逆に協議会の方がコカ・コーラのロゴをつけるというのはハードルが高いかと思う。今のお話で言うと、ビジネスのノウハウも広報についてはいろいろあるので、既に協議会でもいろいろやられているかと思うが、そういうところでまだ何か余地はあるのかなと思う。やり方もアナログ、デジタル等あるが、コカ・コーラでも皆さんに伝えるチャネルというのは変わってきて、私はテレビの世代だったが、今の若い人たちはあまりテレビを見なくなってきているので、テレビで宣伝するよりもYouTubeだったり、YouTubeもまた他のSNSに押されてきている。昔はテレビや電車の中吊りだったものが、今はだいぶ変わってきていると思うので、どういったチャネルで宣伝していくかは、土地柄もあると思うし、世代も見比べながらやっていければと思う。あとは会社としてはダイレクトメール等ハガキを出していたが、今はほとんど使わないので、それこそメーリングリストがあれば一発で全員に同じ文章が送信でき、次の年も100～200名また一瞬で送れるという時代になってきているので、そういうやり方も今後変わってくるのかと思う。

下田氏：環境省では国立公園のストーリーを重視しているのだが、企業でもストーリー性を重視されているのか。水を使っている企業であるというストーリーと、阿蘇くじゅうの草原が水を

育んでいるストーリーが、お互い相容れる部分があることで、親和性が出てくるということがあるのかと思った。

丸山氏：広告や宣伝の戦略を考えるのは日本コカ・コーラという別の会社になるが、ストーリー性というのはやはりあって、それは時代によって変わってくる。サステナブルや SDGs の中でも、昔は空き缶のポイ捨てをやめようということを重要視していたが、最近はそれだけでなく、プラスチックの削減やリサイクルによって地球をきれいにし、それが二酸化炭素の削減につながるというストーリーになってきて、更にはそこから水や森林を大切にしようであったり、生態系を守るために森を大切にしようであったり、一応つながるような形で、時代のニーズに合わせて少しずつ変えてきている。

下田氏：企業がお金を出してもいいと、それに見合ったリターンがあると思えるようなストーリーがあって、実際リターンが目に見える形で何かしらあるということが１番の近道になるのだろうか。

丸山氏：リターンや採算が取れるというのが１番わかりやすいことではあるが、ただやはり環境を保全するということはなかなかその価値が目に見えないところはある。CO2 であればお金に換算することは可能である。水源涵養については、使った飲料の量に対してだいたい３倍くらいの地下水量を保全しているという計算にはなっているが、それがいくらの価値になるのか。生物多様性もお金の価値に換えることは難しい。単純に金額換算はできないので、やはり会社の中では目に見えないけれど価値があるということを認識して進めている。

下田氏：例えばネーミングライツでコカ・コーラの草原とつけると何万人が目にする。そういったことも今後可能性としてあるのかなと思っている。また野焼きという行事によって草原が維持されているが、その様子を撮影して、その中で商品を飲んでもらい、コカ・コーラに阿蘇の草原保全に協力していただいているという動画を作って流す取り組みもできるのかもしれないと思った。

丸山氏：ぜひお願いしたいくらいである。

岩本氏：ボランティアも皆手をあげると思う。

下田氏：炎がすごいので、インパクトのある映像になると思う。

増井氏：年間 2500 人くらいの野焼き支援ボランティアに来ていただいている。今の話であれば例えばアクエリアスやタオル等必要なものがあると思うが、岩本氏から何か気づいた点があれば紹介いただきたい。

岩本氏：皆さん熱い方ばかりである。喉が渇くのでそういったものがあればありがたいが、ボランティアは手弁当で来るのが基本なので、提供というのもあまりおこがましくは言えない。ただ先ほどの阿蘇の草原を守ろうという CM のようなものを企画で作って、皆の元気な姿を見てもらうことはお互いにいいことかと思う。後は、水資源については、今がチャンスだと思う。いろいろな企業が熊本に来ているので、草原の涵養力が森林の 1.5 倍あるというあたりを、企画、セールス的なものにまとめる。やはり待っていてもなかなか募金は集まらないので、こちらから積極的に、どのような方が行くのがいいかわからないが、出向いてお互いに守りましょうというような、共感ができれば協力していただけると思う。もう１つ、先日の新聞に、草千里でドローンを飛ばす催しに関する紹介があった。30～40 分 5,000～10,000 円くらいで安くはなかったと思うが、関東等から 20～30 人ほど集まったということだった。私もこの前ドローンを買

ったが飛ばすところがない。牧野でドローンレース等の企画を行い、あとは牧野と協議会で折半等したら、全国から集まってくるのではないかと思う。とてもいいフィールドだと思う。

※※氏：南小国町のあたりでやっていたと思う。

増井氏：詳細を話すと、ドローンの操縦家で稲田悠樹氏という方が阿蘇におられて、全国的に活躍されている。その方がやっている企画である。南小国ではドローン手形というのをやっており、稲田氏の地元が坂梨の方にあり、馬場豆札牧野ではもうドローンをいつでも飛ばせるフィールドを開けてある。私も稲田氏に話を聞いたが、全国からかなり案件があり、正直馬場豆札だけでは足りないということだった。ただ単にドローンを飛ばしたいという話ではなく、これからドローンが大型化していくなかで、企業の試験するサイトとしても、使用したいという声があるということだった。今回の募金のテーマとは少しずれるが、そういったところでまだまだ引き合いはあると稲田氏から伺った。１つ話を戻して、セールス的に今がチャンスだという話が岩本氏からあった。誰が企業に宣伝していくのか。そういう意味では最初に話が戻るが、熊本県のサポーター認証制度でいろいろな企業にアプローチして、PR もしていくという話も伺っている。こういう風にしていきたいというのが県からあればお聞きしたい。

岸本氏：以前から草原再生に協力して貰っていたところはもう認証という形で動いている。企業、特に地元の阿蘇や近場から理解を深めて、協力を得ることが必要なのではないかと考えている。それについては環境省やグリーンストック、関係機関と連携し、手分けして出向いていくのも、アナログチックではあるが効果が得られるのではないか。

増井氏：本日は牧野組合からも参加して貰っている。こういった寄付金が集まった後の使い道に意見をいただけたらと思う。

鞭馬氏（下の道採草組合）：募金の宣伝をしているのだろうが、一般の牧野関係者はよく分かっていない。牧野の工事等で携わる地元企業もあるが、草原再生募金をやっていること自体をまだ分かっていない。熊本県や全国に広げることもいいが、地元の企業や個人も大事かと思う。そして、その募金をどう活用するのかも各牧野は分かっていない。募金助成を利用した方々は分かっているだろうが、各牧野の組合長なり役員なりがどういう募金の使い道があるのか自体を分かっていないので、それが分かれば各企業からの募金支援にも広がっていくのではないかと思う。

増井氏：１番大事なところである。

鞭馬氏：コカ・コーラさんに多額の寄付をしていただいていることも、こういう場所に出て聞けばわかるが、一般の組合員はわからない。

岸本氏：どうすれば分かっていただけるだろうか。市町村の広報紙に載せてもらうのがいいか。

鞭馬氏：まずはそこからだと思う。草原維持のために、集めた募金をどう使うことができるのか。とにかく各牧野高齢化と資金源がないので、非常に苦しい現状である。そういうところをアピールしていけば、賛同する企業も増え、募金としても集まってくるのではないだろうか。

増井氏：おっしゃる通り、募金助成を使っている牧野は分かっているが、それ以外の牧野は分からないところがあると思う。募金で一番多いのはあか牛の増頭支援だが、支援してもらった人でないと分からないとか、野焼きの再開も再開した牧野でないと分からないというようなことがあると思う。阿蘇の 160 の全ての牧野に分かってもらうためには、今の形では難しいのかもしれない。使った人はありがたかったと言ってもらえると思うのだが。

鞭馬氏：あか牛導入については募金の中では 450 万円ほどとけっこう使われていると思う。これは各牧野に話が行き渡った上での申し込みになっているのか。阿蘇郡全体で畜産をしている牧野も多くいると思うが、そういう方々が分かっていて申し込まないのか、分からないから申し込まれないのか。それ自体がそもそも分からない。

増井氏：皆が分かっていないのか、分かっていて申し込んでいないのかは、分からない。ただ今の話で１番大事なところは、皆がこの募金で何ができるのかを知るということだと思う。そこは次の課題にして、皆で考えていけたらいいと思う。

鞭馬氏：それが分かれば、自分たちの市町村で、企業にアピールして、少しでも賛同してもらえるのではないか。

増井氏：最後にとても良い意見をいただけたと思う。前回の座談会では企業に向けてアピールしてはどうかということが決まった。今回はどうアプローチしたらいいかが議論のテーマ。コカ・コーラボトラーズジャパン様に来ていただき、企業側の事情も把握することが出来た。そういったことを踏まえながら企業へのアプローチも考えていきたい。一方で、企業へのアプローチだけではなく、地元へのどのように使っていくかの見える化がとても大事なことであるという意見が出た。そこは次のテーマになるのかもしれないが、議論を深めていきたい。また企業へのアプローチもグリーンストックや熊本県で進められるところは進めて、進捗を報告できればと思う。本日は短い間だがありがとうございました。

（３）テーマⅢ　野草資源の利活用促進　（ファシリテーター：中坊氏）

◆自己紹介

◆テーマⅢの協議内容について中坊氏より説明

山本氏（GS コーポレーション）：GS コーポレーションでは茅束を収穫し、日本の文化財等がある京都方面に出荷することを進めている。インフラに関しては、倉庫が確保できないという問題がある。GS コーポレーションでは、牧野にお願いして茅材を収穫して貰ってそれを買い取る方法と、人はいないが茅場があるという牧野には場所代を払いボランティアの中から有志を募り一緒に刈りとる方法の２重の方法で行っている。やっと１万束ほど作れるようになってきたが、全国で必要な茅束が年間約 15 万束のうち、13 万束ほどしか供給できておらず、不足している状況である。阿蘇では日本一の草原があるにもかかわらず茅ができていないので、まだまだ可能性は持っていると思うが、大変な作業のため、人手不足が課題である。2025 年大阪万博の日本パビリオンで茅葺屋根を作ることが決まっている。そこで、阿蘇の方にも茅を出してほしいということで、建築家の隈研吾の事務所から話が来ている。それを収穫するとなると大量の茅が必要なので、これからいろいろな方の協力が必要かと思う。現在いろいろな関係者を含めてお願いをし、倉庫や茅刈りの協力を広げようとしているところである。牧野関係で協力してもいいという方がいれば、紹介いただければと思う。

中坊氏：倉庫と人手の問題が課題として挙がってきた。他にもあればお願いしたい。

上野氏：茅刈りのボランティアの立場から一言申し上げる。茅刈りは１月の阿蘇の標高 800m前後の場所で行うので、非常に寒く、なかなか人が集まらない。今のところ野焼きボランティアの中で元気の良い人が入っているが、万博に出すということになるととてもじゃないが足りな

いというのが現状である。GS コーポレーションで刈り方や束の作り方などはかなりルーチン化されてきたので、野焼きボランティアではない人でもこれから入れないとまずいかと思っている。関東でも茅材需要の話は聞くので、茅の需要はまだまだあると思う。

田辺氏（野焼き支援ボランティアの会）：今の阿蘇の全国での立ち位置や、どういったことを期待されているか等あれば山本氏に伺いたい。

山本氏：茅にも水茅と山茅があり、水茅はヨシで水辺周辺や河川敷にあり、山茅はほとんどススキである。日本共通の課題だと思うが、ススキや草原がなくなってきている状況である。昔からやっている富士山の演習場のある御殿場が有名で、白川郷の茅は全てその静岡のものだそう。そこは年間５万束ほど作っているが、阿蘇の方は今年やっと１万束に至った状況。草原はこちらの方が広いのに、茅は向こうの方が出ている。立地的にも東北の方はまだ茅葺屋根が残っているので実感があるが、九州には茅葺屋根自体があまりない。私たちは茅葺屋根の復活も含めて、日本一の茅の生産地にすることを目標にやっている。もっともっと阿蘇から出せる可能性はあるので、先ほど上野氏がおっしゃったとおり寒いのだが、トレーニングと思ってやっていると楽しい。課題の１つとしては期間が１月から野焼きまでの間の２～３ヶ月しかない。若い人で、これで１年間食べていけるのであれば転職したいという人も出てきている。３ヶ月で 300 万円ほど稼ぐ人もいる。その場合毎日朝から晩までなので、そこまでハマりきる人がいればだが。短い期間しかないので農家にお願いしているが、最近農家も３月頃から春の準備に入っているので、新たな人を探していかなければいけないかと思う。

中坊氏：１月寒さの厳しい中、肉体労働をするということが課題ということだった。

竹原氏（阿蘇の自然を愛護する会）：価格の問題をどうしているのか気になっている。確か今１束 500 円にいかないくらいだったと思う。

山本氏：480 円くらいである。

竹原氏：これを生業とするならば、１日やった場合、何束くらい作成できて、日当はどれくらいになるのか。ある牧野の方に聞くと、やっても採算が合わないということを言っていた。他のことをやられていて、茅もやって、茅の方が収入として少なかったのかなという気がした。実際にはどのあたりまでの価格だと採算がとれるのか考えないと、これをボランティアでやろうという考えだとなかなか大変だと思う。さっきおっしゃった通り、収入があれば生業にしてもいいという人もいるかと思う。価格がもう 100 円上がらないかとか、そういう話を何ヶ所かで聞いた。

中坊氏：需要があるのはわかっているので、価格が上がれば、担い手不足が解消されるのではないかというお話だった。

竹原氏：茅の質の問題も影響しているようである。自分のところに原野はたくさんあるが使えるような茅が出ない、斜面によっては曲がりが大きいということも聞いた。茅のレベルの問題がある。どのくらいであれば実際に使えるのか。長いものと短いものはそれぞれどう使えるのか、ということをテレビでも見た。

中坊氏：私も茅について調べたことがあるが、細くて長いものがいいとか葉がついているものがあるとか、使い方がかなり違うようである。品質によってグレードを分ければ、一部は高く売れる可能性があるのではないか。

山本氏：茅の品質は曲がってさえなければ太さ長さは関係ない。２尺止めといって元が 60ｃｍあ

れば長くても短くてもそれなりに使い方がある。曲がっているのだけは嫌う。中にカスカスの古茅が入っていると、屋根に葺いたときにそこから全部崩れていく。阿蘇の茅は中太でしなりがよく質がいいということで日本一だと言ってくれる京都の業者もいる。そういったところをもっと出してほしいというのはある。確かに曲がりが強いものしかない牧野だと難しいが、しかし探せばある。一見なくても奥に行くとある。グリーンストックという関係上、牧野から話を聞き、調査で大概見たと思ったが、それでもまた新しい波野の茅場が出てきた。皆から少しずつでも出してもらうと阿蘇全体で増えるかと思う。

中坊氏：おそらくグリーンストックの取り扱いの茅は、特にグレードは分けずに一律で買い取っているということである。

山本氏：茅葺は 2020 年の 12 月にユネスコ無形文化財に登録された。本当に技術を上げるなら、ちゃんとした品質のものを流通させる必要があるが、今は特に差をつけずに買い取っている。本当は３～５年やらないと技術はつかない。それよりも材料が足りていないということで、一律でやっている。刈払機を使っているが、本来は鎌でないといけない。なぜなら刈払機では切り口が悪い。また CO2 を排出するのであまりよくない。そういうことも含めてできれば鎌でやりたいのだが、鎌ではできないという人が多く、刈払機でやるのを推奨してマニュアル化して、ボランティアでも地元でもやれるような仕組みにはしている。品質を上げて、ランク付けしていくのは今後の課題である。それよりもまず普及拡大を１番にしてやっていきたい。

中坊氏：主に茅の話が多かったが、牧野組合の方で、主に餌用が多いかと思うが、採草の課題があればお願いしたい。黒川牧野では我々も刈ったことがあるが、地形的に厳しい場所が多かった印象がある。風穴と呼ばれる穴が多く空いていて、オペレーター組合でも大きな怪我はしなかったがトラクターがひっくり返ったことがあった。地形的な難しさが牧野によってはあるかと思うがどうか。

井澤氏（黒川地区区長会坊中区）：先日阿蘇西小学校の子どもたちと草原学習をしたとき、米塚の近くに行った。あそこの草はきれいだが、洞窟が随分あり牛も放さないということで、機械や人が入っていくのは厳しいかと思った。話は変わるが、環境省の職員と協力し阿蘇小学校で子どもたちとススキを取って、フクロウを作って、道の駅で販売した。ススキを卒業証書の用紙にも使っている。採算が取れているのかは知らないが、子どもたちの活動として利用している。こういったことで子どもたちの興味関心を惹きつけながら、土産品のようなものを作ることはできないかと思っている。

中坊氏：クラフトや紙等、雑貨を作ることで付加価値が上げられないかという提案だった。

石田氏（ASO 田園空間博物館）：道の駅阿蘇ではなく私個人の意見として言わせていただく。茅等を使ったクラフト品はあると良いと思うし、こういうことをやっていると PR すると更に広がるのではないかと思う。現状道の駅阿蘇の手芸品コーナーはあまり人が来ないということもあり、そういうクラフト品等を置いて、ブログやインスタグラムで PR できたらと思う。

中坊氏：実は九州バイオマスフォーラムで和紙を作って販売をしている。あらゆるものがペーパーレスになって、ハガキも使わなくなってきているため、紙業界はかなり右肩下がりである。年賀状さえ出したことがないという若い人もいるので、紙製品を出してもなかなか売れないということがけっこうある。名刺も制作しているが、今は簡単に自宅のプリンターで印刷できる。そんなに高い値段で売ってはいないが、100 枚 3,000 円という値段でも広まるのは難しい。ま

とまった量で事業として成立するだけの工芸品としていくには難しいと思う。

三宅氏：先ほど茅刈りで、人手がいないという話があった。素人のアイディアで申し訳ないが、例えば高校生が刈った茅が万博の茅葺屋根になったらすごくいいのではないかと思った。その辺りについて教育関係の方から意見をいただければと思う。

山本氏：私は阿蘇中央高等学校の役員関係だが、１度実験的にはやってみた。昨日も中学校の草原学習で私の話と阿蘇茅葺工房で茅葺体験をした。子どもたちに広めていこうと今後も検討していきたい。

中坊氏：教育については環境教育関係のテーマになってしまうが、ススキの穂を集めて、緑化資材の種として販売できないかという取り組みがある。先ほど茅は真っすぐでないといけない、曲がっているとだめという話があったが、穂の部分であれば収穫して、種として販売していくという可能性もあるかと思う。場合によっては高校生や小学生が集めたものでも商品化できるかもしれない。ただ子どもたちが集めたものを実際商品として販売するときに、売り上げが誰のものになるのかというのは難しいテーマになると思う。よく農業高校でも作った野菜を販売したり、道の駅でも高校生が考えたメニューやパンが売られていたりする。採草利用でも放牧利用でも、こうすればより草が集まる等の意見はあるか。

上野氏：少しずれるかもしれないが、世界農業遺産でも阿蘇の草原と農産物の関係について一生懸命言ってはいるが、どうもアピールできていないように感じる。なぜ阿蘇がアスパラの産地なんだ、トマトの産地なんだと人は言う。熊本の人にも市内の人にも福岡の人にも、全然アピールできていない。阿蘇の草を食べた牛の糞と、草原の草、あるいは稲わらと、ミックスして田んぼに戻り、畑に戻り、というその関係性をもう少しアピールしないと、もったいないような気がして仕方ない。ネーミングにしろ草原トマトでもいいし草原アスパラでもいいし、そのあたりをもっとガンガン言ってもいいのではないか。野草資源を使う量は大した量ではないとは思うが。

中坊氏：世界農業遺産の福永氏、何かあるか。

福永氏（阿蘇地域世界農業遺産推進協会、熊本県農業・普及振興課）：細々と PR しているとは思う。協会自体が直接野菜を扱っていないこともあってなかなか難しいところもある。

中坊氏：手段としては世界農業遺産のロゴマークを表示したり、草原再生シール生産者の会で野草を使った野菜にはシールを貼る等の活動はあるが、それほど大々的に PR しているわけではないということか。

福永氏：シールだけではパッと見たときに説明がうまく伝えられないということはあるかもしれない。

中坊氏：道の駅では草原再生シールや世界農業遺産の PR 等は何かされているか。

石田氏：世界農業遺産のシールはあまり見ない。今窓口と企画でブログ等を毎日更新していて、PR はしているが、世界農業遺産を意識しているかというとないと感じている。ただ１つできることは、イベント等で収穫体験、茅刈り体験や草泊まり体験をやってもいいかと思っている。

中坊氏：対策の方で、人手不足、冬場の作業、保管倉庫等の課題が出た。付加価値をつけるというアイディアはたくさん出たが、こういった課題で、特に集める、刈る、収穫するというところの対策、解決策について意見があればお願いしたい。なかなか出ないようなので、我々の方で検討している対策について申し上げたい。先ほどトラクターがひっくり返る事故があったと

いうことについて話したが、地形的に難しいということに対しては、今トラクターにも GPS でナビゲーションシステムが導入されつつあり、上手な人の運転軌跡を翌年使い、その通りに運転すれば事故なく刈り取れるのではないか。また GPS を使ってトラクターのハンドル操作を自動でやってくれる機能があるそうである。ただそれを導入するにはトラクターのイニシャルコストに 100～200 万円くらい上乗せしないといけない。そういった最新の GPS ナビゲーションシステムのようなものを使えば、初心者のトラクターの運転手でも操作ができるのではないか、技術的なサポートができるのではないかということを今考えている。もっと言うと、今刈り取っている草は、堆肥用でも餌用でも、短くてもかまわない。茅の場合は長くないといけないが、採草の場合はむしろカッティングして細かくしないといけないところもある。場合によってはトラクターではなく、ルンバのようなロボットの草刈り機で刈り倒してしまって、集草のロールベーラーの部分だけ人がやればいいのではないか。それが何年後にできるかはわからないが、アイディアとしては、もう既にお掃除ロボットがあるので、草刈りロボットもできるのではないかということで実験を始めていて、河川敷等でラジコンで草を刈る機械がある。ラジコンでできるということは GPS をつければ無人運転もできるのだが、ただ今後のコストの問題もある。そういった技術的なもので人手不足やノウハウについてクリアできる部分が出てくるのではないか。需要については、ほしいという方がけっこう出てきている。他にもなかなか解決しないのが道や倉庫といったインフラであるが、そこはどうしてもお金という問題が出てくる。お金以外でこういう工夫があるのではないか等アイディアがあればお願いしたい。

三宅氏：人件費をペイするほどの稼ぎはなかなか上がらないということか。

中坊氏：茅刈りはおそらく人件費に見合うところもあるとは思う。ただ厳しい作業というのがあるのでないだろうか。

三宅氏：作業が大変な割には収入が少なく、人が集まらないということなのだろうか。

山本氏：茅刈りは技を極めれば、私でも１日 50～60 束できる。500 円で売っても３万円になる。原価は無料。機械を入れなくていい。何かを始めるには投資がいるが、茅刈りは鎌一本と紐だけでほとんどかからない。刈れる牧野があればの話だが。牧野の費用がかかってしまうとなると、自分たちの牧野だからということで牧野の人にお願いしている。形だけ払うところもある。ただ基本的には茅刈り職人にやってくださいということで、売価 480 円丸々懐に入ってくる。１日 50 本、すぐにできるわけではないが何年か経てばできるようになる。そうなると１日２万 5000 円～３万円稼ぐことができる。天気の関係もあるがひと月 90 万円、３ヶ月で 300 万円稼ぐ。収入の面で言えば茅刈りは上手くいけばある。ただ機械でやるとするとまだまだ費用がかかるので、どこか大きなところに開発をお願いしてできればいいと考えている。技術力を示して作ってもらうとか。茅刈りも機械になるといいと思う。機械になると単価も高くできるのではないかと思う。なかなか機械で入れないところにも行っている。機械が入れるようなところは全部採草で使っているので、その合間の谷しか取れていない。そこに人は行けるがトラックは行けないので、運搬が大変である。

古田氏（熊本県農業研究センター草地畜産研究所）：つまり、現在は採草と茅刈りで、野草は利用されているということか。余っている野草地はどれくらいなのか。

中坊氏：私が過去に調べたところ、この阿蘇市だけでも 1000ha くらい未利用の草地がある。そのうちオペレーター組合で採草できたのが 150ha くらいである。おそらく牧野組合にアンケート

で何 ha 未利用草地があるか聞いても正確に答えられる方はほとんどいないと思う。田んぼであれば一反二反と数えやすいが、阿蘇の草原は地形が複雑で、谷の部分は面積としてカウントしても使えないところがある。採草利用可能な土地は地元の方でも把握されておらず、先ほど GS コーポレーションからもあったが、現地を歩いてみるとここは利用できそうだと発見できる。そういう意味では冒頭に挙げた通り、どこに未利用の土地があるのかという情報も大切かと思う。あったとしても許可があるか、道があるかという条件がある。

古田氏：採草については、今オペレーター組合が一番刈っているかと思うが、阿蘇に草刈り専門の組織ができたら、研究所としてもありがたいと思う。ただ採算が合うような価格と販売が難しいかと思う。事業者は安い方を使うと思われるので。草刈り専門の組織ができたら、農業研究センターとしても活用しやすいし、刈る人がどんどん増えると思うので、使える草地が増えると思う。

中坊氏：オペレーター組合のこれまでの状況を言うと、オペレーター組合が採草した場所で、地元の牧野がまた採草利用を始めるところも出てきている。延べでいうと 300ha くらい刈っているが、オペレーター組合が刈った翌年また地元の牧野が利用を始めるところが半分くらいある。オペレーター組合が刈り取ると翌年きれいな草が生えてくるので、掃除をしているような形でもある。そういう意味では常にオペレーター組合が厳しい条件の場所を刈り取ってきたというところがある。だいたい 10 月くらいまで地元の牧野の方が刈り取りをされ、その後残ったところを刈っている。コスト分析をすると、これは農地でも同じだが、耕作放棄地や荒れた田畑というのは不便なところが多い。不便なところだけを刈り取っているので、そういう意味ではコスト高になる。これがもし地元の牧野の方が丸々やめてしまったらコストが下がってくる可能性がある。ただ地元の残っている畜産農家も、刈れるなら他も刈りたいというところもあるので、今後どうなるかわからない。先ほど申し上げた通り、利用を再開するところもある。特に最近は円安と飼料価格の高騰があり、阿蘇の野草のような地元で採れる国産飼料が見直されている。阿蘇の野草は、遠くは鹿児島の錦江湾の方まで運ばれている。茅も日本全国から注文があるように、阿蘇の野草も飼料としておそらく九州中の人がほしい資源になるので、そこを余すところなくどうしていくかが課題になるのではないかと思う。時間も迫ってきたので、他に課題と対策以外に意見や感想があればお願いしたい。

竹原氏（阿蘇の自然を愛護する会）：ススキの話になったが、先ほどのトマトの話も同様で、なかなか阿蘇のブランド化ができていない。そこが一番の課題と思っている。特にあか牛は阿蘇ではなく肥後のあか牛になる。阿蘇近郊で育ったものは阿蘇ではない等、その辺が阿蘇のブランド化ができない原因なのかと思う。例えば先ほどおっしゃったとおり、波野のキャベツは高原キャベツとして波野高原がついていたからよかったと思うが、熊本の名前より阿蘇の方が全国的には有名であったりする。最近はくまモンで熊本を PR しているが、やはり阿蘇の名前をもっと活かす方法を考えた方がいいのかと思う。

中坊氏：阿蘇のブランド化ということも、解決策になるのではないかということだった。主に高付加価値化の意見が多く出た。人手不足も共通の話題としてあったが、その辺りで意見があるか。

窪田氏（阿蘇市経済部まちづくり課）：市役所で移住定住や空き家バンクの担当をしている。役場に来た方の中には地元が埼玉で、たまに阿蘇に来て、行ったり来たりして移住した方もいる。

夫婦や単独で来て、仕事は辞めないでリモートで場所を変えてという二地域居住の方もおられる。その中でこちらに来ている間にアルバイトをしたいというストイックな方、土いじりたいという方もいる。そういう方たちにとっては、一心不乱に茅を刈って、１～３月の間でこれだけやっていればとりあえず飯は食えるという１つの面白味や旨味になる。関係を作れてなおかつ単純な作業もやれて、食える分のお金は稼ぐことができ、また地元に帰られてというような、空き家バンクの中に１つのコンテンツとして、１～３月だったらこの仕事があると入れることも想像できるかと思った。

中坊氏：移住定住の呼び込みの材料になるということだった。

上野氏：草原の価値をわかっていないことは、もったいないと思う。関西の人はけっこうやっている人も多い。

田辺氏：山本氏から京都の人たちが阿蘇の茅を見て宝の山だと言ったという話を聞いた。向こうの方から見ると茅が宝に見えるということもある。

竹原氏：そういう人からみると、野焼きは「お金が燃えている」と錯覚するらしい。

窪田氏：野焼きや茅刈りを入口にして、結果として移住に繋がっていけばいいと思っている。

上野氏：阿蘇にも茅葺屋根がほしい。隈研吾氏も屋根だけ従来の茅葺屋根のものを新潟で作っている。モデルになるものがあれば、アピールになる。

竹原氏：ランドマーク的なものがほしい。

窪田氏：空き家でいらないと言われた物件を茅葺屋根にしてみるというアイディアもある。

上野氏：そういうものがないと盛り上がらない。よそ事になってしまう。

中坊氏：実は阿蘇にも茅葺屋根は残っていて、トタンで覆われているので見えないだけで、残ってはいる。そろそろ時間なので終わりたいと思う。ありがとうございました。

（５）テーマⅠ～Ⅲ　リモート参加者座談会（ファシリテーター：小島）

◆各テーマの協議内容とリモート参加者座談会の進め方（３つのテーマについて参加者が順番に意見を言って貰うこと、時間の制約上、意見集約は行わず意見交換を主目的とすること）について小島より説明

田邊氏（阿蘇地域振興デザインセンター）：テーマⅠについて、阿蘇地域振興デザインセンターとして出席しているが個人的な意見として発言させていただく。人手不足や後継者不足の課題について、解決策やその他の項目に入ると思うが、体験学習を修学旅行等に取り入れる、あるいはインバウンドでこの時期にこういうことをやっていると周知して、野焼きに対する理解を深めて、自分もやってみたいという人を増やしていくということが大事かと思った。情報発信という部類になると思う。実際に体験しないと大切さはわからないと思うので、実際に体験できるような学習の機会を、修学旅行やツアーに盛り込むことが大事かと思う。また別の会議でも発言したが、ルール作りができていないということだったので、やってはいけないことが１つ土台にあれば、ではやってはいけないこと以外で何ができるのか考えられると思う。まずはやってはいけないことだけを挙げてもらえれば、それ以外でこれはやれるかというパッとした思いつきが出てくると思う。話題と逸れるかもしれないが、こうしたルール作りも急いだ方がい

いと思った。

小島：野焼きの大切さをどう周知させるかという非常に大事な意見だったと思う。先日幹事会でも話題になったが、以前大津町の小・中学生からグリーンストックに野焼きをすることは良くないのではないか、CO2 を放出するので時代に逆行しているのではないかという意見があったと伺った。外からは野焼きは時代に合わない、SDGs に逆行しているといった見られ方をされているので、野焼きの意義を知ってもらうために草原学習を実施するということは大事な意見であると思う。また、ルール作りについても、現在いろいろな事業者が草原を利用した観光メニューを作り始めていて、ルールがないと野焼きの火災事故が起きたり、口蹄疫が蔓延する可能性もあるので、事務局としては早急にやっていきたいと思う。

佐藤氏（再春館「一本の木」財団）：テーマⅡについて、先ほど企業からの支援について話が出たが、税制上の優遇はあるのだろうか。そういうものがあれば企業も支援しやすくなるのではないかと思う。

小島：草原再生募金の枠組みでは企業に税制上の優遇はない。企業版ふるさと納税を導入している市町村はある。企業版ふるさと納税を活用すれば税制の優遇措置があるかと思うが、いずれも限定的である。そういった税制措置のようなインセンティブを与えることは非常に大事な意見かと思う。

迫氏（農林水産省九州農政局農村振興部農村環境課）：テーマⅡについて、募金の置き場所や自販機の設置場所を実はよく知らないということがある。先ほどの資料で募金額について道の駅なみのが金額的にも多いとあった。私も何度か通っているが、募金箱の場所がよくわからなかった。まずはそういうものがあるということがもう少し目に触れやすいようにできないかというのが、すぐにできる対応の１つと思う。また、まだ一般対象者について伸び代があるという話もある。私もバイクに乗るが、阿蘇はバイカーにとってはある意味聖地になっている。バイクに乗っているのはある程度の年齢の方で、余裕を持って走っている方が多い。誰をターゲットにするかというのも、１つの方法としてあるのかと思う。

小島：募金箱については私も個人的に伸び代があると思っている。実は私も草千里や大観峰で探したが、10 分くらい探し回り、非常に目立たない場所にあった。もう少し目に留まりやすい場所に募金箱を設置するというのは大事な指摘かと思う。またいろいろなターゲット層に応じて PR の仕方を考えるというのも、大事な意見だと思う。

岡田氏（農林水産省九州農政局農村振興部農村環境課）：テーマ③について、ここ最近 TMR が話題に上がってきている。今、畜産の飼料が非常に高騰している。各飼料会社も TMR については、非常に興味を持っていると思われる。TMR センターを建てるとなったときに、熊本であれば熊本の飼料会社と連携をとって、うまくやっていくいい機会かと思う。阿蘇の草原を使うとなれば国産飼料という付加価値もついてくるので、飼料会社としては非常に魅力的かと思う。TMR は畜産から見ると労力の省力化が図れる。畜産も高齢化が叫ばれて、後継ぎ問題がある。若い世代の人たちも省力化は気にしている。国産飼料と省力化は上手く付加価値をつけてやっていけば、今から魅力的なのかと思う。ぜひ取り組みとしては進めていってもらいたい。

小島：資料高騰の中、阿蘇にある草原を使った TMR というのは今後伸び代があるかと思う。先日野草資源小委員会でも議論したが、草地畜産研究所が TMR を使った試験を行っているところである。ただ試験に使った TMR は阿蘇市内で生産したものではなく、阿蘇の草を使い、大津町の

生産工場で作ったものを試験しているという状況で、要するに阿蘇市内で TMR を生産できる態勢が整えられていないということだった。阿蘇市内で草原を採り、TMR を生産するという、サプライチェーンをうまく構築できればいいということで、今後野草資源小員会を中心に議論を進めていきたい。

鎗水氏（小国町産業課）：テーマⅠについて、小国町の実情を含めて話すと、小国町は草原の管理を主に畜産農家が行っている。どの牧野も高齢化により野焼きの実施が難しくなっている状況である。ボランティアを活用している牧野もあるが、小国町の牧野は急峻な場所にあり、他の阿蘇市等の牧野と比べると野焼きが難しい地形になっていて、ボランティアにも任せづらいところがある。ボランティアもある程度研修して来ているとは思うが、詳しいことまでを教えて、野焼きの担い手の育成をすることによって、今後安心して野焼きができるのかと考えているところである。

小島：一口に草原と言っても阿蘇市、南小国町、小国町、南外輪山の方で気象条件や地形条件が違う。小国町ではなかなか草原の地理的条件が難しいということでボランティアに任せにくいという課題かと思う。協議会としてもボランティアの普及だけではなく、保険メニューを構築することも考えている。今水面下で野焼きのプロ集団を作れないかと事務局で議論をしている。事務局としても策を考えていきたいと思う。

浅尾氏（南阿蘇村農政課）：テーマⅠについて、南阿蘇村では小国町と同様に草原を活用するのは畜産農家が多く、高齢化が進んで野焼きがかなり厳しいという意見をたくさんいただいている。一方で、白水という地域では畜産農家がたくさんいるので、今でも活発な野焼きをしている。畜産農家はいるがたくさんはいないという地域が野焼きに対して人手的にもきついという印象を受けている。牧野ごとに濃淡が非常にあるという印象である。元気のあるところは野焼きに積極的で、人数が少ないところは消極的かと思う。私が畜産を担当しているが、できれば牧野同士で預託を組めるような連携ができると、畜産がいない地域でも、牛の放牧をするということであれば、草原の維持にはつながるかと思っている。しかしそれは南阿蘇村だけの問題ではない。阿蘇の中でもどのくらいの牧野の面積があり、どのくらい牛が放牧でき、どのくらい余りがあり、どのくらいキャパオーバーなのか等、連絡がとれると農家にとってもプラスになり、草原再生協議会でも濃淡の馴らしができるのではないかと思う。もちろん情報開示には牧野、畜産農家の連絡が必要になってくるので、まだすり合わせはしていないが、そのような問題解決ができるのではないかと思っている。

小島：牧野によっても状況が違ってくる。牧野組合 100 人に対して有畜農家が１人しかいないところもあればもっといるところもあり、牧野毎にきめ細かい対応が必要かと思う。いろいろなテーマでもマッチングやプラットフォームが大事だという話になっていて、牧野間で連携するということをどう進めていくのかも改めて大事だと感じた。

小山内氏（地域環境計画）：弊社は阿蘇市からすずらんの自生地の植物調査を請け負っている。また大和ハウスと一宮にある住宅地の敷地内で、草原の創出プロジェクトとモニタリングという形で、阿蘇に携わらせていただいている。テーマⅢについて、背景として、日常の営みの中で使われていた草原が、生活スタイルが変わったことから、少し離れた存在になってしまっていることを課題として考えた。解決策の１つとして、協議会でも取り組んでいるが、様々な草原を使った学習プログラムを継続し、子どもたちを通じて保護者や地域の大人、様々な世代が関

わる仕組みを作り、子どもたちを通じて地域の大人も学んでいくようなものになればいいと思う。営みが戻ってくるにはかなり時間がかかると思うが、小さいイベント等を継続していきながら、最終的に草原の維持につなげていければいいと思う。

小島：草原のことを知っている人と知らない人との谷間が非常に深いと常々感じている。地元の子どももなかなか草原に行く機会がないということなので、そうすると採草を拡大するということは難しいのかなと思う。草原の環境学習を推進するということは大事なことかと思う。

井上氏（高森観光推進機構）：私は協議会には個人で参加しているが、仕事が高森観光推進機構といい、４月から高森駅前で観光案内所を運営している。その中で草原を活用したエコツアーや、地元の農家が野草堆肥を使って作った規格外野菜等を直売している。その中でテーマＩについては、高森町に住んでいて１番の課題だと思っている。地元の野焼きに携わる方に聞くと、どんなに気をつけて、輪地切りや防火帯を広く取っても、延焼を完全に防ぐことが難しい。そこで、私はグリーンコープや生協、いのちと土を考える会等に関わっているが、農業基金のようなものを皆が少しずつ積み立てて、災害や、延焼の補償に充てられるものを作れたらいいかと思った。草原再生募金の中で少しずつ積み立てをしたり、クラウドファンディングや寄付でもいいが、少しでも各牧野の手助けになるのではないかと思った。また、高森町は町有地の牧野が少なく、私有地が多い。先ほど南阿蘇村では村が補償するという話があったが、高森町は私有地が多く、それがなかなか当てはまらない。昨年も４つの牧野が野焼きをやめた。できれば町有地・私有地に係わらず、協議会に入っている牧野組合を守る仕組みができればいいと思った。また、観光客は野草堆肥を使った野菜を販売することに、非常に感動する。付加価値をつけて、あまり安く売りすぎないようにするのがいい。あと地元のおいしい野菜を地元に住んでいる自分たちが買う機会が少ないので、地産地消の観点から、地元で野草堆肥を使った野菜がもっと流通する仕組みが広がればいいと思う。

小島：積立金というのは非常に大事なことだと思う。伺った話では、保険のメニューについて、保証会社が渋るケースもあり、難しいということも考えられる。代理措置として、積立金を作るということは非常に有効かと思う。牧野についても、多種多様な所有形態がある。それぞれうまく協議会で整理した上で、望ましい牧野の在り方や仕組みが構築できればいいと考えている。

西脇氏（宮崎大学）：もっと聞いていたいと思うような、すばらしい話をたくさん聞けたと思う。現場のニーズや、実際はこういうことで困っているということが、もう少したくさん拾えた方がいいかと思った。座談会でこういう声が出るということは非常にいいことだと思う。オンラインだけではなく会場に集まっている方の声も集約すると非常にいいのではないかと思う。井上氏のおっしゃったことはまさにその通りだと思うので、野草堆肥を使った野菜の付加価値を高めるための工夫、そして応援する仕組みを、協議会で考えられないかと思う。もちろん野草堆肥を使った草原再生シールの会があるわけだが、あまり広がっていない。入会のルールが厳しいということなので、別の形も考えた方がいいのかなと思ったところだった。災害積立金については、保険会社にお願いするのもあるが、自主防災として積み立てていくのを協議会で後押しするのもありかと今話を聞いて思った。

小島：私もアカデミック出身だが、研究者と実務者の懸け橋になりたいと思ってこれからもっと頑張りたいと思う。

椛田氏（東海大学農学部）：井上氏と西脇氏から、非常に具体的な話を伺えたと思う。我々は高森町で 40 年前からはなしのぶコンサートを開催していて、地震で６年ほど途絶えて、また５年前から再開している。名前を変え、今年の６月に第５回みなみ阿蘇野の花コンサートとして開催し、コロナで少なくなっているが 300 名前後集まっている。コンサートでは一切募金のお願いはしていないが、趣旨としては阿蘇の町を守るために行っている。環境省の三宅所長も顧問で名前を連ねていて、私は実行委員長なので、実行委員として関わっている者以外で、グリーンストックや地元の方に来ていただき、コンサートのときに募金をお願いできないかという提案をしていただくのもありかと思う。塵も積もれば山となるで、積み重ねかと思った。

小島：コンサートも一種の草原観光利用かと思う。草原を活かしたたくさんの人が訪れる機会に、募金してもらうことが大事だと思った。

町田氏（東京農業大学）：テーマⅡ・Ⅲに関連すると良いと思うのだが、ちょうど昨日トヨタ財団に農大の先生と一緒に阿蘇の草原が持っている炭素量を把握して、それを草原のカーボン・オフセットのメカニズムにできないか相談しに行った。井上氏もおっしゃっていたように、草原に関わりたい人、環境に貢献したい人が、野焼きには行けないが野焼きを支援することによって生まれるクレジットで、延焼や安全管理を保証するということができたらいいと思う。野焼き支援ボランティアにアンケートをとっても、30 年経って続けたいが体力的に厳しい、関わりたいがもう野焼き活動はできない、でも草原に貢献したいという使命感の強い方がたくさんいる。そういう方が次に草原のカーボン・クレジットで阿蘇の草原の炭素や、カーボンニュートラルにも貢献しつつ、草原のボランティアを支援する仕組みができないかと思っている。また牧野の方にいろいろ教えていただきたいと思っている。

小島：炭素固定に着目して、クレジット制度を実装するということは非常に大事なことかと思う。事務局としては昨年から J－クレジットや、いろいろなクレジット制度の実装に向けて検討をしているところである。制度設計的に難しい部分はあるが、くじけずにクレジット化を目指すよう頑張りたいと思う。

中村氏（日本緑化工学会）：テーマⅠについて、ファンドを積み立てて補償等に使うというのはとても大切で良い視点だと思った。グリーンストックが手配をしてボランティアの活動が充実していると思うが、今の形ではいろいろ難しいかと思うので、ファンドのようなものを管理費に回し、例えば各市町村毎年１ヶ所ずつ手入れをするというようなことに活用するのも１つかと考えている。例えば小規模な樹林帯の切り出しや、牧野の隣に樹林帯があるときに、その下草が延焼の１番の危険性になるということで、皆さん悩まれていると思う。そういう下草刈りの処理を毎年１～２ヶ所回していけば 10～20 年経つとけっこうな件数ができるのではないかと思う。そのような仕組みを皆で相談するのもいいかと思った。テーマⅡについては、例えば最近流行っているのがちょっとボランティアツアーのような体験ツアーである。旅行商品にボランティアや農作業の手伝いをつけて、旅行費用は払ってもらい、体験のボランティアができる。そういう旅行に寄付の枠を設けて、旅行代金の一部を寄付していただくという在り方も検討してもいいのではないかと思う。こういう旅行に来た方というのは、その地域に対して非常に愛着を持ってくれると思うので、阿蘇のファンを増やすことにもつながる。役に立つならまた来ようということで、何回も来てくれると思うので、こういう募金の仕組みもぜひ検討していければと思う。テーマⅢについては、私たち日本緑化工学会で、主に阿蘇で活動している内容に

なる。緑化工事に阿蘇の草原の植物を使って、阿蘇の復旧は阿蘇の植物で…。（通信トラブルで中断）

横川氏（九州大学）：本当なら今日は南阿蘇野の下碩牧野の調査を行う予定だったが、台風で行けず悶々としていた。先ほど南阿蘇村の浅尾氏から大変貴重なお話をいただき助かっている。このⅠ～Ⅲのテーマには含まれていないが、放牧というテーマがあり得るかと思う。放牧をどう増やすか、どう維持していくか。放牧を維持し増やすために、預託放牧などの取組を牧野同士で共有する、連携する、そういう実践されているアイデアを南阿蘇村から紹介いただいたのだと思う。そのアイディアももう少しプラットフォームに載せたらどうかという提案である。プラットフォームについては10月から使えるようになるということで、研究者としては非常にありがたい。その中に牧野の牛をどのように共有するか、阿蘇地域全体での牧野間のやりとりのようなデータも載せて、そういう方向への導くようなプラットフォームの作り方をしていただけるとありがたい。それから、井上氏からグリーンコープ等の消費者が基金を作って生産者と連携するという話があったが、それは私が今取り組んでいる共同組合間同士の連携、１つのシステムを具体的に示唆していただいたと思って、非常にありがたいと思った。

福田氏（熊本県企画振興部文化企画・世界遺産推進課）：牧野管理について申し上げると、私たちは阿蘇カルデラこの地域を世界遺産にするという関係で、地元の自治体を含め牧野組合の方と話をする機会がある。やはり牧野組合も多種多様で、大きな牧野組合もあれば非常に小規模な牧野組合もある。人数規模の違いがあるのがよく分かり、元気な牧野とそうでない牧野があると感じる。例えば文化財にするとこういうメリットがあると説明してもなかなか理解してもらえないところや、おそらく牧野組合の求めているニーズと合致しないところがある。やはりそれは牧野組合の規模や構成人数にもよると思う。お互い何を求めているのか、何ができるのかまだ意見交換が必要だと思っている。まだまだ牧野組合からのニーズにお応えできていないというのが自治体の一担当者としての感想になる。

小島：マッチングが共通するテーマであり、牧野と事業者、牧野と行政、牧野と牧野、いろいろなマッチングに向けてこれから対話を重ねていくことが大事だと今回改めて思った。予定時間も過ぎたのでリモート班の座談会はこれにて終了する。

４．　総合討論

三宅氏：ここからの進行は環境省の三宅が担当する。まず、各座談会の代表者から議論要旨の報告をお願いする。

＜テーマⅠ　安心して野焼きできるシステムづくり＞

山下氏：昨年度、県の基礎調査で牧野の課題を押さえているが、より詳細に、どういうことで困っているか深堀する必要があるのではないかという意見がまず出発点として出た。それをいかに把握するかということで、市町村が一番牧野に近く役割が大きい一方で、業務的な制約もあり職員が牧野に入る機会が少なくなっていて、関心が薄れている。担当者が変わるので、勉強会をしてもなかなか引き継がれていかない。その意味で、首長の理解が大事である。またグリーンストックの存在も重要であり、県の基礎調査よりも詳しいものを、このテーマⅠに的を絞って聞いてみてもいいのではないかという話が出た。こういった牧野毎の課題を押さえつつ、共通して使えるツールとして、牧野道整備については、「動噴が入る」「軽トラが入る」という

２つのキーワードを押さえると、野焼きのやりやすさが決定的に変わる。火付けの責任についても、時間がかかるようであれば、保険商品ができるまでのつなぎのようなものを、協議会で考えていく必要があるのではないかという意見もあった。今回大きく出たのが、後継者不足である。今まで通りのやり方では野焼きができなくなるかもしれないということで、新しい体制づくりをしていかなければいけない。そのことでボランティアがより有効に、効果的に動けるようにしていく。最近若い女性も参加していて、トイレがないのは致命的になる。また、軽い作業で終わる牧野、半日で終わる牧野、がっつり１日やるような牧野をボランティア募集の段階でしっかり明示すれば、それぞれのニーズに応じたボランティアの受け入れができるのではないか。牧野組合にしても、援農という形で、異なる牧野間の協力、あるいは組織的な管理をすることもこれから先考えていく必要があるのではないか。最初に申し上げた、牧野毎にしっかりと課題を押さえる、個別の支援のメニューを充実させる、しっかりこの２つを繋いでいくことで、安心して野焼きできるシステムづくりが進んでいくのではないか。そのような意見交換の結果になった。

＜テーマⅡ　財源確保に向けた取組＞

増井氏：そもそも募金がテーマになっている理由としては、募金額が年々減少している中でどうしていくかということがスタートで、前回のアンサーとしては、募金はまだまだ増やせるのではないかという話だった。増やし方として、企業、個人、それぞれアプローチが違うのではないかということで、今回は企業にどうアプローチするのかを議論した。今回ありがたいことにコカ・コーラさんに来ていただいたので、企業がどういったところを考えているかを聞くこともできた。寄付については、企業の発展、地元の発展を共に考えているということで、CSV や共創の概念が大事だという話だった。慈善活動としての側面だけでなく、マーケティングの側面もあるという話をいただいた。もちろん企業なので当たり前のことだが、寄付をいただくには阿蘇に恵みがあり、それがどういうものなのかきちんと示す必要があり、示してもらう方がありがたいという話だった。私も意外だったが、例えば協議会で GIS データをまとめたことについて報告があったが、それが実は役に立つという話だった。なぜかというと、企業も環境の格付けがあり、きちんと認証を取るにあたってデータを使う。例えば生物多様性、水についての情報が整理されていて、格付けに合うような形で提供できれば、もっと阿蘇と協力する企業が増えるのではないかというような意見が出た。そういったところも意識して、データを整理することはかなり意味が出てくるのではないかというアドバイスをいただいた。一方で牧野組合からは、募金がどう使われているか地元に理解されていないのではないかという問題提起を受けた。使っている牧野は募金を何に使っているか理解できているが、それ以外の牧野関係者はなかなか理解できていない。そういった理解が進めば、地元の個人や企業の支援も増えるのではないか。次回座談会があれば、個人、阿蘇の人にどうやってこの募金を知っていただくかというところを深堀できたらいいというところまで今回議論が進んだ。

＜テーマⅢ　野草資源の利活用の促進＞

中坊氏：このテーマの課題は、野草資源をどう刈り取って、集めて、販売するか。解決策としては、いかに付加価値をつけるのか、新しい活用方法があるのではないか、こうすれば人が集ま

るのではないか、というような話であった。まず課題では、GS コーポレーションが茅刈りをしているが、１～３月冬の非常に寒い時期に刈り取るので、人手不足である。１日２～３万円くらいで、短期間で 300 万円くらい稼ぐ人もいるが、ただ厳しい作業で、技術もいる。保管する場所も課題になっている。どこにどれくらいの未利用草地があるのかという情報も未知数であるので、その把握手法も課題として挙げられた。トラクターの入る道がないとか、黒川牧野では風穴と呼ばれる穴が多く、地形的に厳しい条件の場所もある。技術については、茅刈りも本来は鎌がいいが非常に難しいので、刈払機を使っている。トラクターに関しても、地形的に厳しい条件では運転が難しいという問題があり、過去にトラクターがひっくり返った事故もあるので、熟練の作業が必要になる。一方で、新しい製品として、例えば道の駅でススキで作ったフクロウや野草紙を売って、雑貨のような土産品を作ったらどうかという意見も出た。解決策としては、付加価値を上げるということだが、阿蘇ブランドを充分活かせてないのではないか。野菜も阿蘇の名前で出ている野菜が、阿蘇高菜は出ているが、トマトやイチゴ、キャベツ等は熊本の名前で出ているので、阿蘇の草原を使った野菜というものに対して今一つ付加価値をつけられていないのではないか。付加価値が上がると、例えば茅の値段ももう 100 円上げられるのではないか。収入を上げることで担い手の確保にもつながるのではないか等のアイディアがあった。人手不足に関しては、どうしても季節労働的なところがあるが、移住定住者の中には都市と農村を行き来する方々もいるので、冬場の茅刈りの時期だけ阿蘇に移住して、茅刈りの仕事をして稼いで、阿蘇を楽しむというような移住定住の１つのあり方として仕事になるのではないかというアイディアも出た。せっかく茅刈りが注目されているので茅葺屋根が阿蘇にあってもいい。ススキの種が緑化用の資材として販売できる可能性も出ているので、子どもたちが刈り取り体験をするなかで、ススキの穂だけ刈り取るようなものだと簡単にできるのではないか。技術的なことに関しては、トラクターのナビゲーションシステムを使えば初心者もハンドル操作の事故を減らして、安全に操作できるのではないか、ルンバのような草刈りロボットが草原に入れば、茅刈りの省力化ができるのではないか。以上のようなアイディアが出た。

＜リモート班　（テーマⅠ～テーマⅢ）＞

小島：テーマⅠ～Ⅲについて、広く議論を行った。そのため各テーマについて深化することはできなかったが、普段なかなか交流のない方々の意見交換ができたので非常に有意義な機会だったと思っている。テーマⅠについては、市町村担当者から、例えば小国町では阿蘇市のような広い草原ではなく、地形的にも急な場所が多いため、ボランティアにお願いすることも難しい状況であるという話だった。野焼きの延焼はどんなに気をつけても防ぐことはできない、起こり得てしまうことでもあるので、そういった意味で安心して野焼きできるシステムを早急に整備する必要がある。協議会では保険会社と交渉して保険メニューを考えているところだが、もし難しい場合は、クラウドファンディングや、延焼が起こってしまった場合に補償に充てるお金を自分たちで積み立てていくというのも１つの考え方としてありではないかという意見があった。保険会社に頼らず、自分たちでセーフティネットを作るというのも、自主防衛という意味では大事だろうという意見があった。また少しでも焼く草量を減らすことが、延焼防止対策にもなる。放牧も非常に大事な方法かと思うが、いろいろな牧野の状況があり、非常に畜産農家が少ない、ゆとりがない牧野もあれば、ある程度畜産農家がいてゆとりがある牧野もある。

そういった牧野同士が連携して、もう少し預託放牧や、いろいろな形の連携をして、少しでも草原を利用していくということも、回り回って安心して野焼きできるシステムづくりに繋がっていくのではないか。全てのテーマに共通すると思うが、野焼きに対する理解が足りないということで、子どもたちやインバウンドの旅行者に対して、野焼きをする意義、草原環境学習を推進していくべきだろうという意見もあった。テーマⅡについて、募金箱の置き場所に伸び代があるのではないか、目立たない場所に置いてあることもあるので、もう少し目立つ場所に置けば寄付額も増えるのではないかという意見があった。また企業からどのように募金を巻き取るかについては、何かしらのインセンティブが必要ということで、税制上の優遇措置があるといいのではないかという意見があった。また、ボランツーリズムの一種として、草原ボランティアを旅行のパッケージとして組み込むことで、旅行代金の一部を草原再生募金に充てるというアイディアもあった。また、はなしのぶコンサートが定期的に開催されていて、多いときは300 人程が集まるということで、環境を活かした多くの人が集まる機会に募金活動をすることも、大事な取り組みなのではないかという意見もあった。テーマⅢについて、現在も輸入飼料が高騰しているので、自分たちで手配できる発酵 TMR は今後将来性があるのではないか。熊本の飼料会社と連携を進めていくといいのではないかという意見があった。実際野草堆肥を使った野菜は付加価値があるので、決して安売りはせず、付加価値を PR して然るべき値段で野菜を売っていくというのも、地産地消の観点から大事な取り組みだろうという意見もあった。炭素固定に着目したカーボン・オフセットができないか。クレジット化を社会実装できないかという意見もあった。以上が各テーマの意見となる。総じて今後マッチングが非常に大事になるだろうということが、私が抱いた感想である。牧野と牧野、牧野と事業者、牧野と観光事業者、牧野と行政のマッチングをいかに進めていくかというのが、世界遺産を指定していくためにも、早急に整備していく課題かと思う。

三宅氏：本来なら質疑応答や意見交換の時間を設けたかったが、既に時間が超過しているので、ここで終了とさせていただく。お気づきの点等があればいつでも事務局にご連絡お願いする。

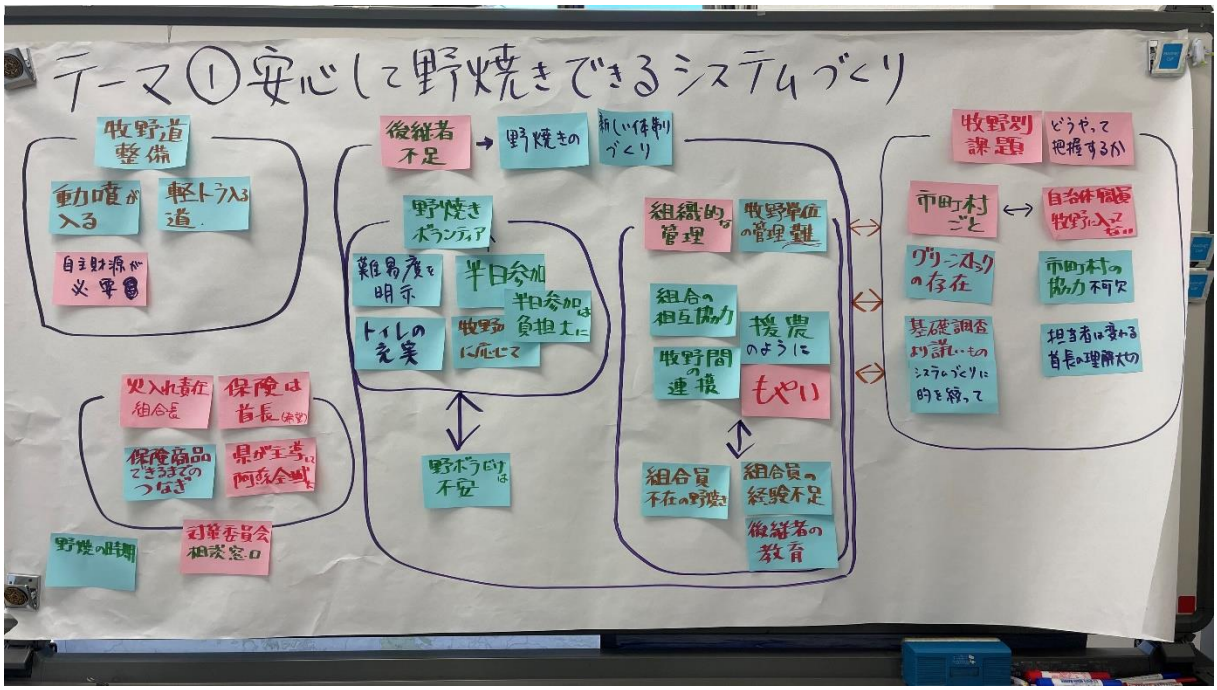
５． 閉会

築島氏（環境省九州地方環境事務所）：７月に九州地方環境事務所長に着任し、本日この会議に初めて参加させていただいた。第１部、第２部ともそれぞれ活発に議論をし、改めてこの協議会が非常に良い協議会だと感じた。時間もだいぶ押しているということで、本日いただいた意見を踏まえ、事務局の立場としても、九州地方環境事務所の立場としても、それぞれできることを考えて進めていきたい。引き続きよろしくお願いする。本日は長時間、また台風が来ている中ご参加いただきありがとうございました。

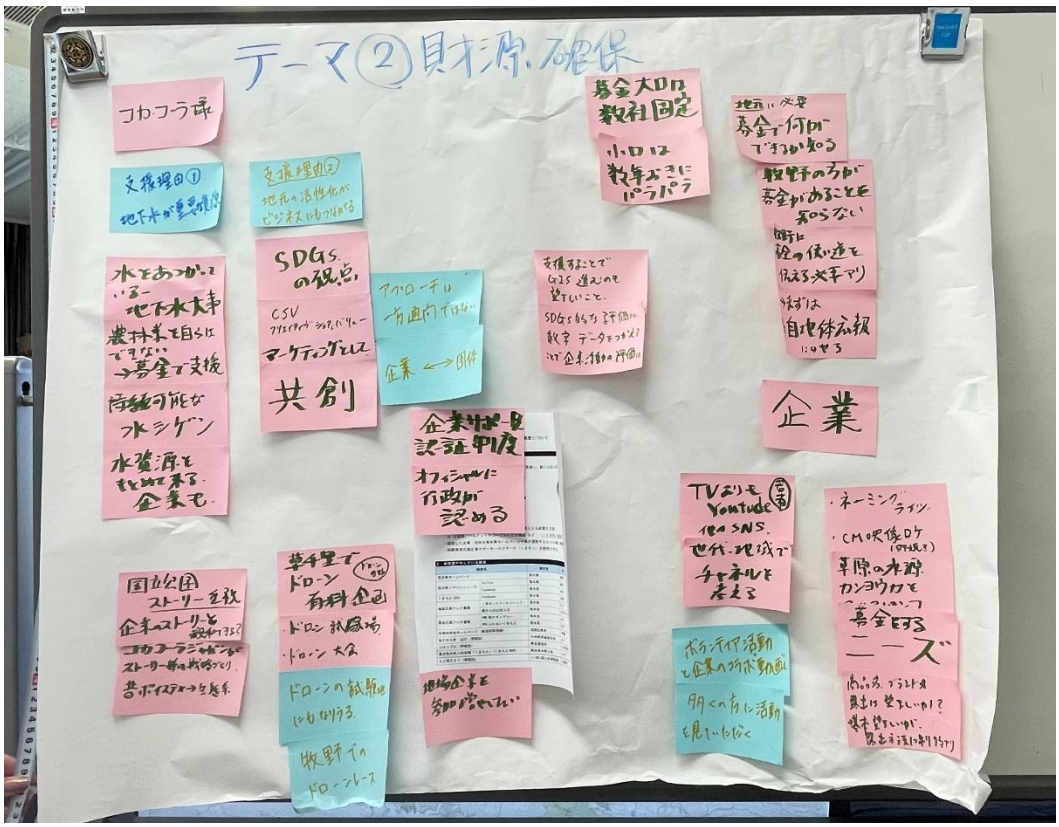
以上

【参考　各座談会　模造紙】

○テーマⅠ　安心して野焼きできるシステムづくり

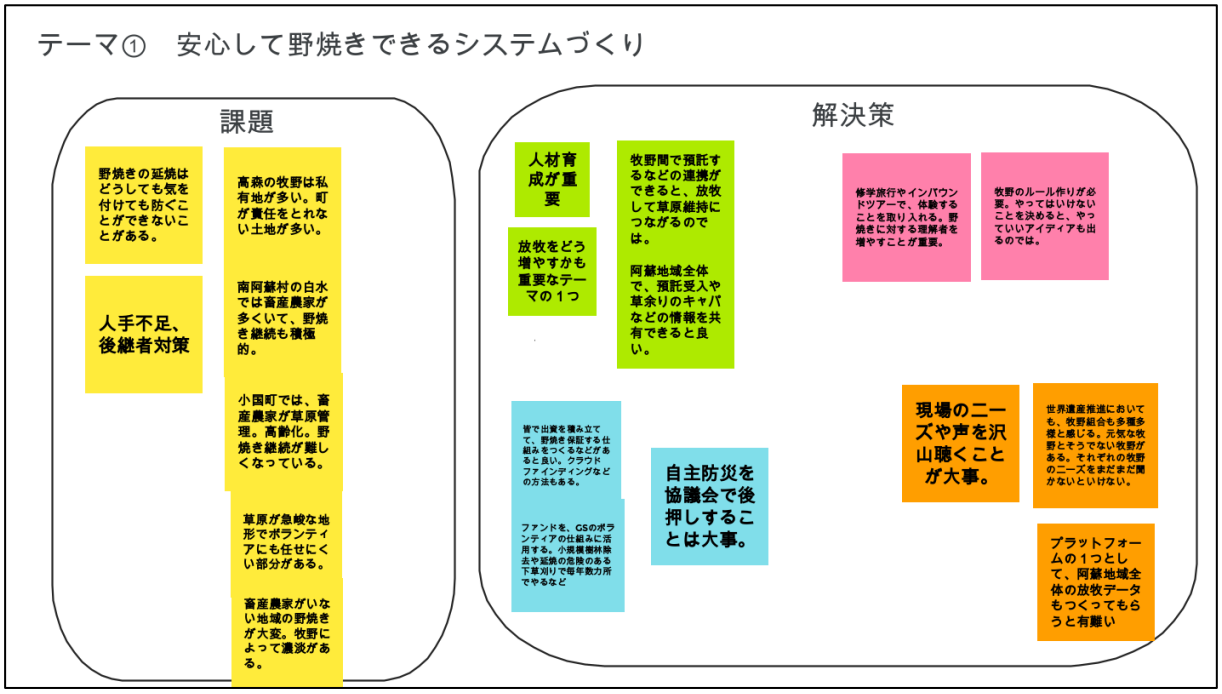


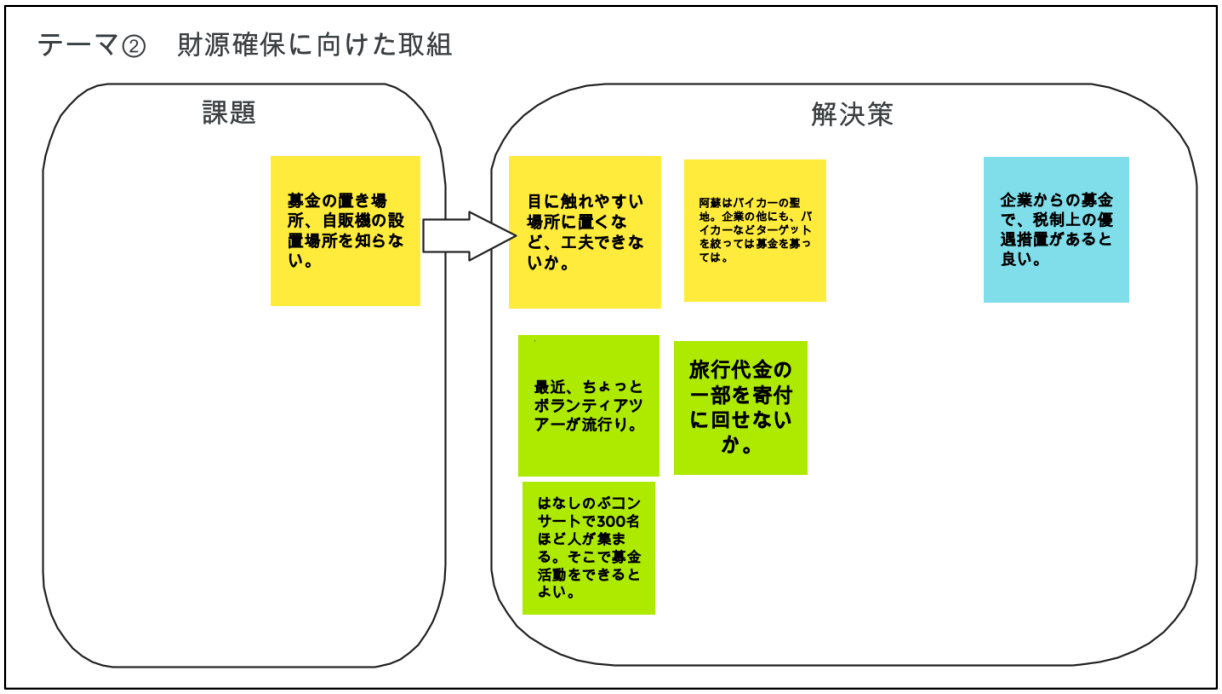
○テーマⅡ　財源確保に向けた取組

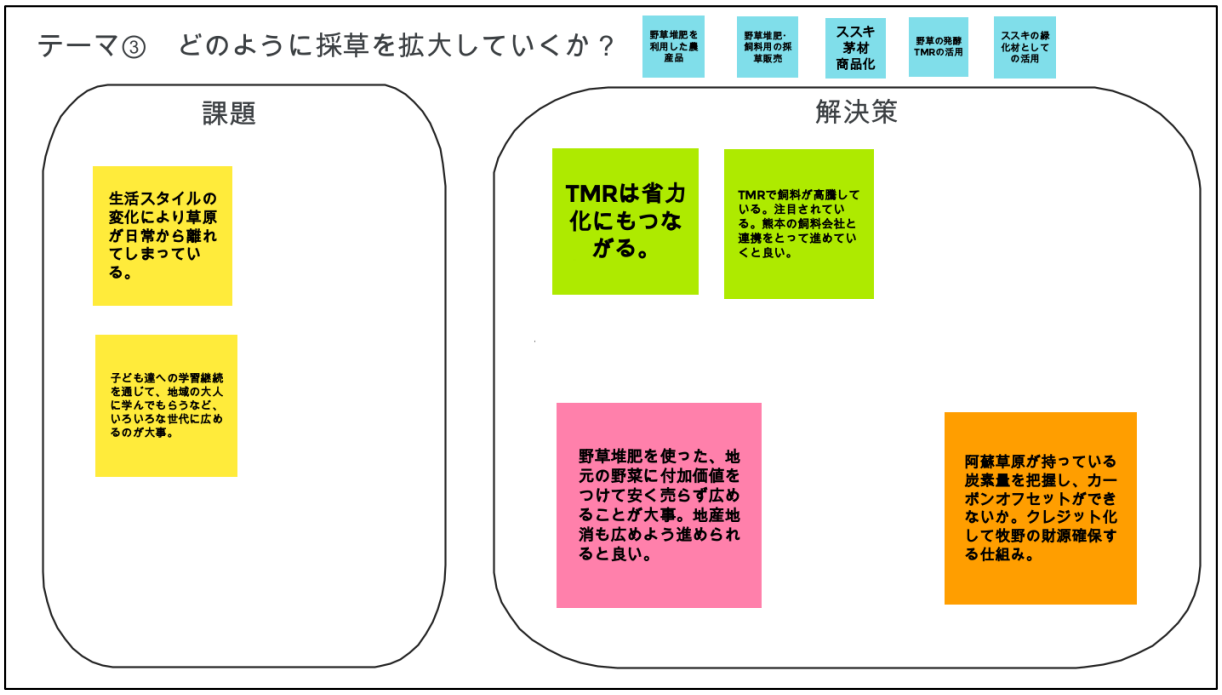


○テーマⅢ　野草資源の拡充に向けた取組

○リモート班




テーマ②　財源確保に向けた取組
課題
募金の置き場所、自販機の設置場所を知らない。
解決策
目に触れやすい場所に置くなど、工夫できないか。
阿蘇はバイカーの聖地。企業の他にも、バイカーなどターゲットを絞っては募金を募っては。
企業からの募金で、税制上の優遇措置があると良い。
最近、ちょっとボランティアツアーが流行り。
旅行代金の一部を寄付に回せないか。
はなしのぶコンサートで300名ほど人が集まる。そこで募金活動をできるとよい。


テーマ③　どのように採草を拡大していくか？
野草堆肥を利用した農産品
野草堆肥・飼料用の採草販売
ススキ茅材商品化
野草の発酵TMRの活用
ススキの緑化材としての活用
課題
生活スタイルの変化により草原が日常から離れてしまっている。
子ども達への学習継続を通じて、地域の大人に学んでもらうなど、いろいろな世代に広めるのが大事。
解決策
TMRは省力化にもつながる。
TMRで飼料が高騰している。注目されている。熊本の飼料会社と連携をとって進めていくと良い。
野草堆肥を使った、地元の野菜に付加価値をつけて安く売らず広めることが大事。地産地消も広めよう進められると良い。
阿蘇草原が持っている炭素量を把握し、カーボンオフセットができないか。クレジット化して牧野の財源確保する仕組み。